人文

第五五号

2008

京都大学人文科学研究所

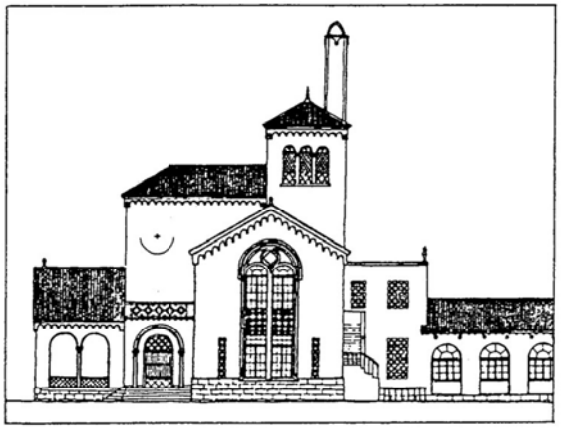
ISSN 0389－147X

人文　第五五号　二〇〇八年六月三十日　京都大学人文科学研究所発行　共同印刷工業　非売品

人　文　第五五号

2007年４月―2008年３月

も　く　じ



随想

鈍・根・運 …… 山室　信一　1

現代中国研究センターができるまで …… 石川　禎浩　8

講演

夏期公開講座 ……

ジャックの膝、ドニーズの太もも――ドニ・ディドロ『運命論者ジャックとその主人』における性と語り――（王寺賢太）／「悪者」は恋人たちの最後の救世主――モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》とエロスの没落――（岡田暁生）／事件は帝国からふってくる――シャーロック・ホームズの推理――（井野瀬久美惠）　8

開所記念講演会 ……

少数者を生きる――広東ショオ族の言語文化――（中西裕樹）／「創氏改名」における同化と差異化（水野直樹）／ハリとハラとハラノムシ――鍼灸師の古医書研究――（長野　仁）　12

彙報 …… 19

共同研究の話題 ……

漢字情報学は構築できたか …… 安岡　孝一　32

二十世紀中国の社会システム …… 森　時彦

南アフリカ、アイルランド、第一次大戦 …… 小関　隆

助手班考 …… 菊地　暁

所のうち・そと ……

滝沢馬琴とパクパ字印 …… 宮　紀子　38

ブータン訪問記 …… 田辺　明生

東チベットの高原にて …… 池田　巧

今村仁司と共同研究の作法 …… 田中　雅一

書いたもの一覧 …… 45

鈍・根・運

山室信一

「用力之久而一旦豁然貫通」―『大学』のなかの一節を学生時代に読んでいて、いったいどのくらいの久しきにわたって努力すれば、こんな境地に達する日が訪れるのであろうかと訝った記憶がある。

その豁然たる様とは取り留めもなく散らばっていた砂鉄が磁石をあてると一瞬にして形をなす、といったように見える現象に近いのかもしれないが、その是非はともかく私のように愚鈍な者でも根気をもって、ただただ一つのことを追い続けていると、時にはそれに近い幻覚にとらわれることもあるようである。

もちろん、それは単に自らがいかに長きにわたって不明であったのかを逆証するに過ぎないのだが、先に上梓した『憲法9条の思想水脈』を書き続けるなかで衆議院法制局勤務時代以来、三〇数年にわたって目にしてきた史料の数々が自らせり上がってきて、勝手に私の目をめがけて飛び込み、一つの流れの中に整っていくような「錯覚」のなかに漂っていた。ただ、雑然たる物事が収斂していくためには、基軸と磁場とでもいうべきも

のとが必要なのであろう。

このとき基軸となったのは、一九八六年の入所以来、思想連鎖という概念によって考え続けてきた「ものの見方」であり、それが今回は「思想水脈」という視角につながった。他方、磁場となったのは第一次世界大戦を対象に基幹研究という試みを発起するための世話人の方々との「戦争と平和」についての議論の場であり、更にそこに国民投票法制定などの憲法「改正」に向けての政治動向への危惧が重なって、一種のトランス状態のなかで執筆していたように思う。

拙著そのものが、いかなる意義をもつかは評者に委ねるしかないが、「押し付け憲法」か否かの議論が六〇年間延々と続いてきたことを顧慮すれば、世紀と国境を越えて憲法第九条を位置づけ直す作業の場において、まさに瓢箪から駒のような瞬間がそこに生まれ出たのかも知れないのである。

現在、基幹研究第一号である「第一次世界大戦の総合的研究に向けて」は二年めに入り、常に談論風発の「総力戦」となっているが、新たな事実や考え方を教えられ、白熱する議論に身を浸らせることは実に快い疲労感であり、共同研究の妙味を満喫させて戴いている。人文研での最後となる共同研究班で、このテーマに即しつつ、「近代」とは、「世界」とは、「戦争」とは何か、などをラディカルに問い直す機会に恵まれ、そして才気と学識とユーモアに溢れた班員の方々に出会えたのは、何よりもの幸運であると感謝している。

思い返せば、幼かった私に「鈍・根・運」という言葉を父は教え、無能な者だからこそ努力を怠るな、そうしていれば運を引き寄せることができる、その運とは人や時との出会いだと伝えてくれた。飽きっぽい私の性質を見透かしての言葉だったに違いないが、人生の黄昏を迎えつつある今になって、その真意がようやく感得できたような気がしている。

「久しさ」も時には罪であるのかもしれない。

現代中国研究センターができるまで

石川禎浩

人文研の現代中国研究センターは、現代中国についての研究を重点的に推進するとともに、京都大学における現代中国研究者が持続的な共同研究を行うための拠点を構築することを目的として、二〇〇七年四月一日に設置された。今この随想を書いているのは、二〇〇八年三月三一日だから、ちょうど一年になる。この一年、予算の執行や国内の他拠点（早大、慶大、東大、東洋文庫、総合地球環境学研究所、および共同設置者の人間文化研究機構）との打ち合わせ、連携事業をはじめとして、色々と手探りで活動を進めてきたが、初年度の事業を何とかやり終えて年度末の日を迎えることができた。この一年を振り返りつつ、いささか慌ただしく設置された感もあるこのセンターが、どのような経緯で設置されるに至ったのかを、手控えの意味を込めて紹介してみたい。

この拠点の端緒となる話が、そもそもわたしのところに伝えられてきたのは、奇しくもちょうど二年前の二〇〇六年三月三一日のことだった。その日、わたしは本館の研究室で自身の科

研費の報告書を書いていたのだが、そこへ金田章裕文学研究科教授から急に電話が入った。ご自身が委員を務めている人間文化研究機構の地域研究推進委員会が、現代中国地域研究の拠点整備を始めるから、京大も名乗りをあげてはどうか、ついては人文研の現代中国研究の実績と現状のデータを至急とりまとめてもらえないか、というお話であった。話の内容はいささか複雑であったものの、かなり重要な問題だったため、電話のあとすぐに、金文京所長、森時彦教授に相談しようとしたが、お二人とも出張などのため、連絡がつかなかった。やむなく、その足で金田教授の研究室を訪って直接に話をうかがい、四月一二日に京大の関係部局の現代中国学研究者を召集して、実績データのとりまとめを話し合うことになった。

京大の中国研究は世に知られるほどの厚い実績を持っているが、こと現代中国について言えば、必ずしも豊富な研究者を抱えているわけではない。一二日の会議をうけ、各部局より寄せられたデータを大急ぎでとりまとめて資料を作ったのち、四月二四日に経済学部上海センターの山本裕美教授とともに東京に赴いて、人間文化研究機構での現況聴取に臨んだ。その後も、何度かにわたって機構に提出する拠点構想案を練ったり、それと前後して学内関係者との意見調整を経たりして、最終的に京大の拠点は人文研に置かれることになるわけだが、そこに至るにあたっては、その端緒となった年度末のあの日にしてもそうだが、たまたまわたしが連絡のつく場所にいた、ということも

いささか作用している気がする。

京大で言えば、わが人文研の他に、経済学部上海センターも拠点設置に意欲あるやに見うけられたが、頻繁に修正を求められる計画調書の作成に伴う意見調整のさいに、担当の方が電話でもメールでもすぐに連絡をとれないということが、現実としてしばしば起こった。行きがかり上、連絡のつく側の人間が色々なことを主導していく（あるいはさせられる）成り行きになるのが、現今の大学でのこの手のプロジェクトの常であろう。思えば、かつて研究所の助手をしていた時、狭間直樹教授はわたしに、「常に研究室にいて、机に向かって勉強しさえすればそれでよい」ということをしばしばおっしゃったが、今回は、勉強していたかは別にして、「研究室にいた」ということが、ひとつの結果につながったのかも知れないという感がある。

むろん、京大の拠点が人文研に置かれるにあたっては、中国近現代史関係の共同研究班をはじめとする先達の実績が高く評価されたことを無視することはできない。また、他拠点とのバランス・事業分担において、京大拠点が現代中国研究の中でも「人文学的研究」を担当するよう求められたこと――これは人間文化研究機構側の強い要請でもあり、その背景には当然に京大東洋学の蓄積があろう――も、人文研にとって有利に働いたと言えるだろうから、すべてを担当者がつかまりやすかったから、という理由で説明できるわけではないのはもちろんである。

新設される現代中国研究センターにとって、さらに幸いだっ

たのは、所内の合意を得て、このセンターを単なる所内措置ではなく、京大全学の規程に定められたものにできたことである。全学企画委員会でのヒアリングのための資料の作成など、これも準備には若干の手間を要したが、結果として研究所移転のタイミングとも重なり、しかるべき研究スペースの配分を認められることにつながった。今、新館四階のわたしの研究室の向かいでは、現代中国研究センターが引っ越しの荷物の到着を待っている。人間文化研究機構からの派遣研究員である袁広泉氏（客員准教授）が昨年一〇月に着任し、明日からは助教の小野寺史郎君がこのセンターに加わる。今後は、かかる陣容とスペースを有するに至ったセンターを、名実ともに備わった「研究」の拠点とすべく、努力していかなければならない。たとえ、書かなければならない書類が多くても、出なければならない会議が多くても。

講演

夏季講座

ジャックの膝、ドニーズの太もも

——ドニ・ディドロ『運命論者ジャックとその主人』における性と語り——

王寺賢太

ドニ・ディドロの『運命論者ジャックとその主人』は、奇妙な恋愛小説である。その奇妙さはまず、小説の語り手と読み手、ジャックとその主人、そしてこの二人の主人公が行方の知れぬ旅路のなかで出会う人々が、入り乱れながら小咄を語り始めるこの作品の語りの形式において見いだされよう。それらの登場人物たちの言葉は、一つの階層的な秩序のなかに収まることも、起承転結を持った物語らしい物語を織りなすこともない。ディドロにあって、このような小説の結構はすぐれて唯物論的なものであり、無数の原子の間に生じた揺らぎが出会いを生み、その出会いの連鎖によってこの世界が生成したと考える、エピクロスの哲学を反復するものであった。

しかし、脱線の連鎖からなるこの小説にも、繰り返し回帰する主題が見いだされる。その主題こそ、特権的な出会いとしての恋愛である。そもそもディドロによれば、小咄というものはすべて恋物語にほかならない。とはいえ、この奇妙な小説のなかでは、恋愛の絶頂であるはずの性交の場面にくると、きまって語りは脱臼し、言葉は解体する。恋物語がかいま見せるのは、語る欲望をかきたてながら、それ自身は決して言葉によって統御されることのない、ひととひとの間に開いたアナーキーな空間なのだ。そこに、魅かれあう男同士の間の決闘や、嫉妬に駆られた女の復讐や、親友の恋心を弄びつづける詐欺師の計略などが繰り広げられるのもそのためである。

だとすれば、この小説のなかでたえず中断されながら再開されるジャックの語る恋物語が、彼が戦場で膝に銃弾を受ける逸話に始まって、ようやくたどり着いたある城で、恋に落ちた娘ドニーズの膝に靴下留めをつけるまでを語るのは偶然ではない。それが暗示しているのは、恋する者はなんらかの傷を負った人物であるほかないこと、そしてまた恋愛とは隔たりの経験であるほかないということであろう—ジャックも言っている、「ドニーズの太ももはね、ほかの娘のよりもずっと長かったんですよ」と。この隔たりは、小説の末尾で示される二人の結婚の逸話によってものりこえられはしない。この幸福な結末は、ただちにドニーズの浮気に悩むジャックのひとりごとによって打ち消されるからだ。ただそのひとりごとは、そうして自分自身に出会う者だけが持つユーモアが、終わりのない隔たりの経験を生きることを許すのだ、と示唆するようでもあるのだが。

「悪者」は恋人たちの最後の救世主

——モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》とエロスの没落——

岡田暁生

モーツァルトのオペラ《ドン・ジョヴァンニ》は、ダ・ポンテの台本による彼のいわゆる三大喜劇オペラのシンメトリックな中心に位置する闇である。前作《フィガロの結婚》で傷ついた男女の絆の回復が主題になったとすれば、《ドン・ジョヴァンニ》ではその解体が、そして次作《コシ・ファン・トゥッテ》ではその復元が主題となるのである。

ドン・ジョヴァンニを主人公とする演劇／文学には、モーツァルト以前に既に、スペインの劇作家モリナやモリエールやゴルドーニといった長い系譜が存在していた。また十八世紀後半においては非常に多くの作曲家が《ドン・ジョヴァンニ》をオペラ化していた。それらと比べたときのモーツァルト作品のドラマトゥルギーの特徴は、フィナーレにおける主人公の地獄落ち

が単なる天罰にはなっていない点である。モリナ以後のすべての《ドン・ジョヴァンニ》劇は教訓劇であり、無心論者が神から罰せられるという形になっていたのに対して、モーツァルトは主人公が自らの意思により快楽を放棄することを拒絶し、その結果として地獄に落ちていくという筋立てに変更したといえる。

とりわけ注目すべきは、地獄落ちの後のもう一つのフィナーレ、つまり「悪事の果てはこの通り」というフィナーレのモーツァルトによる解釈である。つまり本来悪党が放逐されて共同体が再び回復される場であるはずのこのハッピーエンドが、モーツァルト版においては「共同体の解散式」に作り上げられているのである（ドンナ・アンナはドン・オッターヴィオとの結婚を延期し、ドンナ・エルヴィーラおよびレポレロはパートナーであったドン・ジョヴァンニを失って一人でどこかへ去っていく）。若い恋人たちの結婚によって共同体の回復を示唆して終わる喜劇の定型が、ここでは正反対の方向へと反転させられているのである。恐らくモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》の中には、ゲーテの『ファウスト』と並ぶ「近代世界」の一つのモデルが予告されているといえるだろう。つまり神を喪失した世界にあって自ら神のなりかわろうとする近代人の姿、そして神というデウス・エクス・マッキナがいなくなったせいで劇に予定調和的な終止符が打てなくなってしまい、必然的に「開いた終わり」しか出来なくなっていく近代演劇の予告がここにある。

事件は帝国からふってくる

——シャーロック・ホームズの推理——

井野瀬　久美恵

名探偵シャーロック・ホームズ・シリーズは、今回の3作品のなかで「再読」という言葉がもっともぴったりくる作品ではないだろうか。ホームズ物は今なお世界中で読み継がれている。日本でも、一八九九年に『緋色の研究』（原作一八八七年初出）が「血染の壁」なる邦題で毎日新聞に連載されたのを皮切りに、十指に余る出版社から翻訳、全集が出され、今に至る。いうなれば、ホームズ物は探偵小説の古典であり、「再読」も珍しいことではない。

実は、ここ——「再読」できること——にこそ、ホームズ物の魅力を解く鍵もあるように思われる。

一般に、探偵・推理小説は、一度読んで犯人がわかればそれで終わり、というのが多い。では、なぜホームズ物は繰り返し「再読」できるのか。それは、ホームズ物が単なる謎解きではなく、ホームズという探偵もまた、単に謎を解く存在ではないからだろう。では、いったい何がホームズに、ホームズが展開する推理に、単なる「謎解き」「犯人探し」を越える魅力を与えているのだろうか。

探偵ホームズは、五感をはたらかせて、一見無関係に思えるもの、あるいは目には見えない（ないしは、まだ見えていない）ものにこそ関心を払い、追い求めようとする。つまり、彼の推理とは、関係ないように見える事実と事実を論理的に結びつけ、つじつまをあわせられる因果関係を与えることに、その本質がある。事件の解決とは、この「関係性」をなぞることに他ならない。だからこそ、ホームズ物では、事実Aと事実Bの間に存在する（であろう）関係性を読者に想像させるように、ヴィクトリア朝時代のロンドンや地方の田園風景はじめ、事件の現場や時、それと関わる社会の細部を丹念に描いている。それが、われわれのような後世の読者には、「われらが失いし世界」を覗くような楽しみともなっているのだろう。

問題は、何がこの「関係性」を担保していたのか、である。その典型的な例は、登場人物の「過去」——現在の状況を作り出した、それも、当人がすでに葬り去ったと思っていた「遠くの過去」だろう。『四つの署名』しかり、『背中の曲がった男』しかり。そして、こうした「過去」としっかりと結びつき、物語の中に

点在する諸事実を論理的に結びつけていたものこそ、大英帝国という空間なのである。

当時のイギリスが島国ではなく、七つの海、五つの大陸に広がる帝国であった事実のなかにホームズ物を置いてみると、それがヴィクトリア朝時代の読者に植民地をめぐる想像力をどのように育んだかが見えてくる。と同時に、なぜこの時代に「私立諮問探偵」なる職業が成立しえたのかについて、ホームズが暮らすベイカー街二二一番地Bを訪れた多様な依頼人を通して考えてみれば、帝都ロンドンの幸せそうな家庭の中に存在した「光と闇」もまた浮かびあがってくるだろう。「光」の中に見えてくる「闇」――ホームズ物の中で、それは、「光」の中だからこそ楽しめる「闇」と隣り合っていたのであった。

開所記念講演会

少数者を生きる

――広東ショオ族の言語文化――

中西裕樹

ショオ族は、中華人民共和国が認定する五五の少数民族のひとつで、人口は約七〇万人、主に浙江省・福建省・広東省・安徽省・江西省の山がちな地域に居住している。彼らは、ミャオ族・ヤオ族と民族系統が同じで、古代の「蛮」の末裔という説が有力である。その後、ミャオ族は主に西南（湖南・四川・貴州・雲南・広西）へ、ヤオ族は主に南（湖南・広西・広東）へ、ショオ族は主に東南へと移住していった。ショオ族は高度に「漢化」しており、外から見える風俗習慣の類は周囲に居住する漢族客家人とそれほど変わらない。

大部分のショオ族は現在、漢語（中国語）の客家方言によく似た言語を話しており、広東省の海豊県・恵東県・博羅県・増城市に住む一五〇〇人ほどのショオ族のみが、ミャオ・ヤオ系のショオ語を保持している。いま、便宜的にこのショオ語を保持しているショオ族のことを「広東ショオ族」と呼ぶことにする。

現在ショオ族とされている人々のエスニシティーについて、解放後の民族政策によって形成された部分が大きいことは、つとに指摘されてきた。広東ショオ族も解放前は自らを「ヤオ人」と認識していたという。建国後の「民族識別」を経て、彼らは自らをショオ族とみなすようになったのである。しかしながら近年、他の地域のショオ族や一部の研究者から、解放前の自己認識を根拠に、広東ショオ族の使用言語はヤオ語であり、大多数のショオ族が話している言語こそが民族固有の「ショオ語」であるという誤った言説が提出されている。

以上のように、広東ショオ族は、

一、中国国内の少数民族として、

二、人口わずか一五〇〇人の危機言語の話し手として、

三、同族内の被差別者として、

三重の意味で少数者となっている。言語学的には、大多数のショオ族が話している言語が漢語に属することは間違いなく、言語をもって民族を決定するならば、彼らこそショオ族ではないということになろう。ここに見られるのは、民族文化の象徴である言語が他民族からの借り物と言われるのは許せないという意識である。しかし、そもそも「民族」というものは国家によって規定される概念で、「民族識別」以前は、ショオ族と漢族客家人の境界は現在のように截然と分けられていたわけではない。ショオ族が隣人の言語である客家語を話すようになっても、まったく不思議なことはないのである。

今後は、ショオ族のエスニシティーやその形成過程を解明していくと共に、わずかな人々によって使用されているショオ語の保持に協力していくことが学術界の重要な仕事となるだろう。

「創氏改名」における同化と差異化

水野直樹

「創氏改名」は、日本支配下の朝鮮において実施された政策としてよく知られており、歴史認識をめぐる議論でもしばしば取り上げられる問題である。しかし、創氏改名政策のねらいやその実態に関しては、多くの誤解が見られるのが実情である。

一九四〇年に実施された創氏改名については、創氏と改名とに分けて検討する必要がある。なぜなら、「氏を創る」ことは法的に義務であったが、「名を改める」ことは任意とされたからである。

創氏の第一のねらいは、家の称号である「氏」を設けることによって、朝鮮の家族制度を日本化することにあった。朝鮮人の名前は本貫・姓・名の三要素から構成されているが、本貫と姓は男系血縁集団（宗族集団）を表わすものであって、日本のような家の称号に当たるものがなかった。天皇制国家体制の基礎としての「イエ」を植民地朝鮮に植え付けようとしたのが創氏政策だったのである。朝鮮民事令（日本の民法に当たる法令）の改正により、六ヵ月の期間内に氏を設定して役所に届け出ることが朝鮮人に義務づけられ、届け出ない場合は戸主の姓をそのまま氏にすることが定められた。

氏の設定に際して、日本人風の氏とすることが推奨されたが、これに対しては朝鮮人のみならず日本人の間からも批判・反発があらわれた。朝鮮人が日本人と変わらぬ苗字を持つことに対して優越意識から反発する日本人がいたり、総督府内部でも警察などが日本人と朝鮮人の区別ができなくなるとして反対したりした。そのために、この問題を主管していた総督府法務局は日本人と同じ氏を設定することを抑制する方針をとり、宗族集団が本貫にもとづいて氏を設定することをも黙認することになった。本貫にもとづく氏の設定は、多くの場合、「朝鮮的」な氏になるからである。

他方、改名に関して当局は放置したばかりか、むしろ抑制する姿勢を示し、従来の名を日本語の訓読みで読めばよいという見解を表明した。

このように、「イエ」制度を朝鮮に移植する手段としての創氏は、さまざまな形で強制的に推進されたが、植民地支配秩序の根幹であった支配者と被支配者の「差異」は維持されることになったといえる。「同化」と「差異化」の両側面が表われていたという点で、創氏改名は日本の植民地支配の特徴をよく示す政策であった。

（追記）詳しくは、拙著『創氏改名―日本の朝鮮支配の中で―』（岩波新書、二〇〇八年三月刊行）を参照されたい。

ハリとハラとハラノムシ

――鍼灸師の古医書研究――

鍼灸鴻仁院長　長野　仁

私は鍼灸師として病苦に悩む患者諸氏への治療に明け暮れるかたわら、古医書をたずねて全国の図書館や古書肆をめぐり、捜求した史料を臨床に還元すべく研究している。いうまでもなく、鍼灸は漢方とともに中国系伝統医学の双璧をなすが、私は現代日本の術式の直接の淵源となっている、鎌倉期から江戸期にものされた和製の鍼灸文献を主たる調査対象としている。であるから、私と戦国時代の古写本『針聞書』との出会いは必然だった、といえるかも知れない。

本書が歴史の闇から甦ったのは五年半前、大阪古典会の創立百周年オークションにおいてである。会期中はハンマープライスに至らず、出品者が開館準備を進める九博の準備室に持ち込み、そのまま歴史資料の第一号となった。垂涎の書が九博に帰したことなど知る由もない私は、せめてもの記録にと展観会場で披見した所感を自著に認めておいた。ところが、その寸評が

九博の東昇研究員（現・京都府立大学准教授）の目に留まり、正規の研究依頼が舞い込んできたのである。

『針聞書』が衆目を集めるのは、六三種ものハラノムシが紙数の半分ほどを割いて自由奔放に描かれているからである。その絵図たるや、「きもカワ」なデザイン、「へたウマ」なタッチ、しかもカラフルときていて、今ウケする「ゆるキャラ」の条件をことごとく備えている。もともと、ハラノムシどもがミュージアム・グッズとしてホームラン級の成功を収める素地は充分にあったといってよい（二〇〇八年三月、九博の評議員を務める福岡ソフトバンク・ホークスの王貞治監督が〝脾臓の虫〟のぬいぐるみをお守りとして購入し、テレビや新聞を賑わせ、ファンの要望に応えてソフトバンク系列のショップでハラノムシ・グッズを販売する話まで持ち上がっている）。

とはいえ、ハラノムシどもを満載する『針聞書』が国立博物館の収蔵品である以上、一般ウケすればそれで良しとはゆくまい。鍼治療の教本に奇妙奇天烈なハラノムシが満載される理由は何なのか、いかなる人物の手にかかる編著なのか、鍼治療の術式はどのような流儀なのか、といった歴史的位置付けが不可欠である。そこで私の出番となり、これまでの研究成果を『戦国時代のハラノムシ』（国書刊行会）と『虫の知らせ（ジェイ・キャスト）』にまとめて世に問うた。

『針聞書』は、元行と号する茨木二介という人物の手にかかる古写本である。奥書の永禄一一年（一五六七）は、織田信長の上洛をもって中世と近世を区分する、日本史上の節目にあたる。「摂州住人上郡（かみぐん）」とあるから、彼は現在の大阪府茨木市域を統治していた茨木氏の一族と目される。また、翌一二年（一五六九）には今新流という流派を興していたことが、北里柴三郎記念室・橋本文庫架蔵の『今新流鍼法伝書』から窺われる。

『針聞書』は四つ、『今新流鍼法伝書』は二つの構成要素からなるが、私は両書とも、先師達から受け継いだ先行文献をそのまま転写し、それらを単に合冊しただけのものと考えている。こう書くと何の価値も無いような印象を与えかねないが、実はその正反対である。つまり、史料不足に起因して不鮮明だった一五～一六世紀間の鍼灸のありようを温存する元行のテクストは、日本鍼灸史を解き明かす新たな情報源たりうる。

諸師に就いた元行は、やがて今新流を名乗るが、何をもって今風かつ斬新を謳ったのだろうか。思うに、それは鍼灸の教育改革だったのではないか。第一に教育方式、一から多へ。現存する両書の叢書的構成は、彼が一子相伝を志向したのではなく、私塾に不特定の

門人を集めて諸流を併列的に伝授していたことを物語ろう。第二に教育内容、術から学へ。『針聞書』は「夫れ人に天人地の三気あり」から始まるが、彼が病症状と治療穴（つぼ）を一対一で結ぶ簡便法に止まらず、医学理論（陰陽・三才・五行）に根ざした術式に腐心していたことを象徴していよう。

されば、ハラノムシどもの位置付けや、いかに。中世の日本では、『康富記』の応永二五年（一四一八）の記録を初出に、寄生虫とは異質なハラノムシを病因や病状と認識してきた痕跡があり、現存六三種（本来は六四種で一種欠落。六四は実数としてより全体・全部を象徴する数としての意味合い強い）、空前絶後のハラノムシ図鑑を内包する『針聞書』は、その到達点（最終形態）を示したものといえる。ムシどもの姿かたちは、それこそ虫眼鏡すらない時代の空想の産物に違いないが、私は編集上、獣型八種・亀型二種・魚型三種・虫型五種・蛇型二五種・顔面型四種・岩石型五種・混合型一一種に分類した。（紙数はとうに尽きているが）特徴あるものをいくつか紹介しておこう。

前出の〝脾臓の虫〈獣〉〟は、病人の縮図（ミニチュア）である。真っ赤に火照って千鳥足でフラフラのムシが体内で暴れると、病人はムシと同様の症状を起こすというわけだ。このタイプには、物憂げな目でうなだれる〝悩みの虫〈蛇〉〟、嘔気で大きく口を開き目が点になって苦しんでいる〝霍乱の虫〈蛇〉〟、喉から手が出るほどに甘味に目がない〝脾積〈獣〉〟などがある。

ヤンマのような〝腰抜の虫〈虫〉〟は、病因を実体化したものである。急性のギックリ腰は、このムシが唐突に飛来して長い胴で腰椎を締め上げた結果だと、図像で表現している。

この類には、心臓で暴走する〝馬癇〈獣〉〟、鋭利な嘴の一撃で癲癇を起こす〝クッチの虫〈蛇〉〟、SF映画の「プレデター」のような上下左右に開く大きな口で齧りつく〝腹痛の虫〈蛇〉〟などがある。

詞書からイメージの源泉に行き当たるものもある〝小姓〈蛇〉〟は諺の「疾膏肓に入る」の典故となった『春秋左伝』の二豎子（景公の夢に現れた病の化身）、〝蟯虫〈虫〉〟は庚申信仰の母体となった『抱朴子』の三尸（特に性欲にまつわる下尸）、〝陰虫〈虫〉〟は仏典（『大集経』など）の赤白二滯説（男の白滯と女の赤滯とを分泌する虫）を踏まえている。

〝桂積〈岩石〉〟、〝水腫〈岩石〉〟、〝胃積〈混合〉〟などは、触診によって腹壁越しに感じた体内の様相をビジュアライズしたものと思われる。

戦国の人々は、現代人からみて荒唐無稽なムシども

の絵図を見て、どのような感想を抱いたのであろうか。私には、石坂浩二のCMで有名になった「エヘン虫」と近い感じで捉えていたように思われてならない。「エヘン虫」は架空のキャラだが、ああいうのがノドに居座ればさぞイガイガ・ゴホゴホするだろうし、ドロップを舐めて退治すればさぞスッキリ・スースーするだろうと、ビフォア・アフターを瞬時に理解させるインパクトがある。戦国人も似たような心性を持ち合わせていたのでは……もとい、戦国から伝わる心性の延長線上に「エヘン虫」なる新種が生み出されたともいえまいか。

ここで、『針聞書』に対して持たれる疑問の一つについて考えておこう。それは、六三種のムシのうち、鍼治療の記述がたった一三種にしかみられず、大多数には生薬による処置が指示されていることである（植物・動物・鉱物を複雑に配合する漢方薬というより、薬草を単味ないし数味で用いる民間薬だから、鍼治専門書の附録とみれば見合った水準ではある）。私の予想では、ハラノムシ図鑑の作者は元行より一～二世代さかのぼる人物だろう。恐らく、その人物はハリ治療という技術の専門家（ハリで何でも治す）ではなく、ムシ治療という部門の専門家（ムシなら何でも治す）だった。師弟関係の結果としてムシ治療の図鑑は、ハリ治療の叢書の一部を構成することとなった、そう考えると私にはとても腑に落ちる。

医学史家の故・服部敏良博士は、「〝虫〟という病気は一般の人々によって作り出された病気のため、当時の医書に記載される筈もな」く、そのため「〝虫〟という病気がどんな症状を呈していたかは明らかでな」く、「日記類にも単に〝虫〟〝虫所労〟〝虫腹証〟と記しているのみである」との見解を示されている。

図鑑の作者は、もちろん世襲制の高級医官などではなく、戦国時代の「蟲師」というべき土着医療の担い手であったに違いない。戦国の世は、医家の渡明や医書の輸入が隆盛をみて、最新の中国医学が怒涛のごとく押し寄せてきた時代でもあり、土着のムシ治療は集大成をみたにもかかわらず、ついぞ表舞台に躍り出る機会を逸してしまったのだろう。

来年は、元行が『針聞書』を筆写してから四四〇年目に当たる。「おしりかじり虫」の呑気な歌が流行するなか、ハラノムシどもは癒しの救世主として見事復活を遂げたというわけである。

（二〇〇七年一一月一五日、本館にて）

彙　報

おくりもの

◦藤原辰史助教は日本ドイツ学会奨励賞を受賞（二〇〇六年六月十日付）

◦山室信一教授は第十一回司馬遼太郎賞を受賞（二〇〇八年二月十二日付）

◦石川禎浩准教授は日本学術振興会賞を受賞（二〇〇八年三月三日付）

◦石川禎浩准教授は第二回山口一郎記念賞を授賞（二〇〇八年三月十五日付）

◦守岡知彦助教は平成十九年度山下記念研究賞を授賞（二〇〇八年三月十三日付）

訃　報

◦日比野丈夫名誉教授（九三歳）は、七月二日逝去。

◦夛田道太郎名誉教授（八三歳）は、十二月二日逝去。

人のうごき

◦教育組織の制度改正により助教授から准教授に、助手から助教・助手に名称変更（四月一日付）。

◦金文京教授（東方学研究部）を当研究所長（四月一日～二〇〇九年三月三一日）に併任。

◦森時彦教授（東方学研究部）を附属漢字情報研究センター長（四月一日～二〇〇九年三月三一日）に併任。

◦立木康介大学院人間・環境学研究科助手は、当研究所（人文学研究部）准教授に昇任（四月一日付）。

◦伊藤順二准教授（人文学研究部）を採用（四月一日付）。

◦石川禎浩准教授（東方学研究部）を附属現代中国研究センターに配置換（四月十六日付）。

◦RACHAUD, François フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇八年三月三一日）。

◦森時彦教授（東方学研究部）を附属現代中国研究センター長（四月一六日～二〇〇九年四月十五日）に併任。

◦小池郁子助教（人文学研究部）を採用（五月一日付）。

◦小林善文　神戸女子大学文学部教授は、特任教授（五月十日～九月三十日）。

◦VITA, Silvio　ローマ大学教授は、客員教授（文化研究創成研究部門、七月一日～二〇〇八年三月三一日）。

◦袁広泉　大学共同利用機関法人人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附属現代中国研究センター、十月一日～二〇〇八年三月三一日）。

◦中西裕樹（東方学研究部）助教は、辞任（二〇〇八年三月三一日付）の上、同志社大学言語文化教育研究センター助教就任。

◦齋藤智寛（東方学研究部）助教は、辞任（二〇〇八年三月三一日付）の上、東北大学大学院文学研究科准教授就任。

海外での研究活動

◦竹沢泰子教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、三月十三日成田発、ア

メリカ人類学会に於いてアメリカ人類学専門家会議「人種と医療」に出席、全米日系人博物館、サンフランシスコ州立大学等に於いてアジア系アメリカ人アーティストにインタビューを行い、マサチューセッツ工科大学において「人種と科学」の会議に出席、四月三日帰国。

。立木康介准教授（人文学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、二〇〇六年十一月五日大阪発、Centre psychanalytique de consultations et de traitements に於いて「現代の心理的症状に有効であり、社会的ニーズにも対応する、精神分析治療の技法、理論、倫理を求めて」の研究に従事、四月十六日帰国。

。船山徹准教授（東方学研究部）は、日本学術振興会経費（一部先方負担）により、四月十七日大阪発、オーストリア科学アカデミーに於いて早期漢訳仏典シンポジウムに出席し、四月二三日帰国。

。藤井正人教授（人文学研究部）は、四月十九日大阪発、ライデン大学に於いて南インド・サンスクリット写本ワークショップに参加し、四月二三日帰国。

。船山徹准教授（東方学研究部）は、四月二四日大阪発、上海師範大学に於いて中国仏教に関する講演会と討論会に出席し、四月二八日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、四月二九日大阪発、オスロ大学東洋学研究所に於いてナレッジベースと TLS について研究打合わせ、Harnackhaus に於いて「ドイツにおける TEI プロジェクト」ワークショップに出席、研究報告を行い、ベルリン科学院に於いて TEI 技術評議委員会会議に出席し、四月三十日帰国。

。富永茂樹教授（人文学研究部）は、四月二二日大阪発、国立東洋語学院及び国立図書館に於いて研究資料収集等を行い、五月七日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、五月九日大阪発、ハイデルベルグ科学院に於いて「中国石刻仏典」計画について研究打ち合わせ等を行い、五月十四日帰国。

。籠谷直人教授（人文学研究部）は、五月十七日大阪発、中正国際記念館に於いて国際学術検討会「全球化與華僑華人問題的転変」で報告を行い、五月二十日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、五月十六日大阪発、The British Academy に於いて国際会議「A hundred years of Dunhuang, 一九〇七～二〇〇七」に出席、The British Library に於いて表音文字書写中国語文献の調査を行い、五月二二日帰国。

。加藤和人准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、五月十九日大阪発、Palais des congrès de Montréal に於いて Public Population Project in Genomics（P3G）に出席及びゲノム疫学研究についての資料収集等を行い、五月二五日帰国。

。藤井正人教授（人文学研究部）は、五月二三日大阪発、テキサス大学オースティン校に於いて第四回国際ヴェーダ学ワークショップ出席及び論文発表を

行い、五月二九日帰国。

。曽布川寛教授（東方学研究部）は、五月二六日大阪発、内蒙古考古研究所・内蒙古博物館、承徳市文物局、故宮博物院に於いて中国美術の調査及び資料収集をい、六月一日帰国。

。稲葉穣准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、五月二二日成田発、IsIAO 及びローマ大学及びナポリ東洋大学に於いて中央アジア宗教史に関する資料調査及び研究打合わせ等を行い、六月四日帰国。

。石川禎浩准教授（附属現代中国研究センター）は、共同研究費（一部先方負担）により、六月五日大阪発、フランス社会科学高等研究院に於いて現代中国研究についての研究打合せ及び国際学会 "Mao as an Historical Subject" に参加、オックスフォード大学に於いて現代中国研究関連資料調査、バーミンガム大学に於いて現代中国研究についての研究打合せを行い、六月十四日帰国。

。菊地暁助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、六月十八日大阪発、シュトゥットガルト民族博物館、シュヴァルツバルト野外博物館、ライヒェナウ僧院等に於いて文化的景観の保全と活用に関する資料調査及び巡検を行い、六月二五日帰国。

。宮宅潔准教授（東方学研究部）は、七月四日大阪発、淑明女子大学に於いて「中国古中世史学会」に出席及び発表を行い、七月八日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、七月十六日大阪発、Institute of History, Archeology and Ethnology of the Peoples of the Far East に於いてロシア極東地域所蔵漢字文献の調査研究を行い、七月二三日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月二十日大阪発、西南大学に於いて「文学遺産」国際論壇に参加及び論文発表を行い、七月二五日帰国。

。古勝隆一准教授（東方学研究部）は、七月二十日大阪発、上海社会科学院に於いて国際学術討論会に参加し、七月二六日帰国。

。安岡孝一准教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、八月一日常滑市発、ウィスコンシン歴史協会、ミズーリ歴史協会、アメリカ議会図書館、ニューヨーク公立図書館に於いて文字コードとキー配列に関する所蔵調査を行い、八月十三日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、八月十日大阪発、首都師範大学に於いて第六回中国古代小説文献小説及数字化国際検討会にて論文発表、韓国学中央研究院に於いて蒙元法律文化及麗元関係史国際学会にて論文発表を行い、八月二十日帰国。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十一日成田発、アジア協会及びカリフォルニア大学バークレー校に於いてアジア系アメリカ人の人種表象について調査を行い、八月二十日帰国。

。池田巧准教授（東方学研究部）は、七月二六日大阪発、中央民族大学、西南民族大学に於いて西南中国の言語に関する文献調査を行い、康定近郊に於い

てムニャ語とリュズ語の調査を行い、八月二三日帰国。

。田辺明生准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月一日大阪発、ブバネシュワルおよびプリー近郊に於いて民主化と社会変容に関する現地調査を行い、八月二五日帰国。

。岡村秀典教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十三日大阪発、内蒙古文物考古研究所、固陽県北魏遺跡等に於いて北魏仏像の調査、内蒙古自治区博物館に於いて資料調査、和林格爾県に於いて盛楽城遺跡の調査、中国社会科学院考古研究所等に於いて調査成果の意見交換を行い、八月二六日帰国。

。向井佑介助教（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十三日大阪発、内蒙古文物考古研究所、大同市博物館に於いて北魏仏像の調査を行い、中国社会科学院考古研究所に於いて調査成果の意見交換を行い、八月二六日帰国。

。山室信一教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十六日大阪発、大英博物館、オクスフォード大学、ライデン大学に於いて近・現代ヨーロッパにおける空間の構築と表象の実態調査を行い、八月二九日帰国。

。坂本優一郎助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十六日大阪発、大英博物館、オクスフォード大学、ライデン大学に於いて近・現代ヨーロッパにおける空間の構築と表象の実態調査を行い、八月二九日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、八月二十日大阪発、中華仏学研究所に於いて仏学情報学ワークショップに出席及び研究打合わせと資料収集を行い、八月二九日帰国。

。石川禎浩准教授（附属現代中国研究センター）は、共同研究費により、八月二十日大阪発、上海市档案館、中山大学に於いて中国社会主義運動に関する資料調査を行い、林則徐記念館、琉球人墓地等に於いて中国革命史旧跡の調査を行い、八月三十日帰国。

。山﨑岳助教（附属漢字情報研究センター）は、八月十八日大阪発、同安県林氏祖廟、月港等史跡等に於いて明代紳士に関する資料収集、明代海港・海防遺跡の調査等を行い、九月一日帰国。

。李昇燁助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十九日大阪発、釜山市立市民図書館、国家記録院等に於いて植民地期地方自治関係資料調査を行い、九月一日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月三十日大阪発、金泉市内及び国立中央図書館に於いて植民地期の神社跡などの現地調査及び資料調査を行い、九月四日帰国。

。森時彦教授（東方学研究部）は、共同研究費により、八月二五日大阪発、近代史研究所、中共中央文献研究室、四川大学、四川省社会科学院、上海档案館に於いて中国近現代史に関する研究打合わせ及び資料収集を行い、九月七日帰国。

。高木博志准教授（人文学研究部）は、

九月三日大阪発、オスマン文書館に於いて国民国家の比較史の調査を行い、ボアジチ大学等に於いて国民国家比較のシンポジウムに出席、トルコ歴史協会等に於いて研究意見交流を行い、九月九日帰国。

。齋藤智寛助教（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月五日大阪発、大英博物館に於いて敦煌出土文書の調査を行い、九月十二日帰国。

。久保昭博助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二九日大阪発、フランス国立図書館に於いて文学理論関連資料調査を行い、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンに於いて文学理論関連調査を行い、九月十三日帰国。

。山﨑岳助教（附属漢字情報研究センター）は、九月九日大阪発、蓬莱閣、天后宮等に於いて明代海神信仰に関する調査及び史的景観に関する調査を行い、九月十六日帰国。

。立木康介准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月三日大阪発、Ecole Normale Supérieure に於いて「精神分析運動の歴史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で据え直す試み」のための資料・文献収集を行い、九月二五日帰国。

。岡村秀典教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二四日大阪発、中国社会科学院考古研究所及び定州市博物館に於いて北魏仏教遺物の調査及び調査成果の意見交換を行い、九月二七日帰国。

。向井佑介助教（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二四日大阪発、中国社会科学院考古研究所及び定州市博物館に於いて北魏仏教遺物の調査及び調査成果の意見交換を行い、九月二七日帰国。

。藤原辰史助教（人文学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、二〇〇六年十月一日大阪発、ロベルト・ボッシュ財団医学史研究所に於いてヴァイマル時代からナチス時代におけるドイツの健康主義（ヘルシズム）に関する研究に従事、その間、文部科学省科学研究費補助金により、国立図書館、州立図書館に於いてナチスの人種主義に関する資料調査、市立文書館に於いてナチス収穫感謝祭の人種主義、ヴァイマル末期の農民運動調査の人種主義史料調査、連邦軍事文書館に於いてナチス時代の軍需産業と強制労働の史料調査を行い、七月二三日一時帰国。八月七日、再出国、ナチ党党大会跡、軍事法廷跡等に於いて近・現代ヨーロッパにおける空間の構築と表象の実態調査を行い、九月三十日帰国。

。麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、九月二七日大阪発、中央研究院文哲研究所に於いて「跨文化視野下的東亜宗教伝統」討論会に出席及び資料収集を行い、十月一日帰国。

。冨谷至教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二七日大阪発、東国大学校に於いて研究集会を行い、国立中央博物館西大門刑務所歴史館に於いて資料収集を行い、十月一日帰国。

。岩井茂樹教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九

月二七日大阪発、東国大学校に於いて研究集会を行い、国立中央博物館西大門刑務所歴史館に於いて資料収集を行い、十月一日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二七日大阪発、東国大学校に於いて研究集会を行い、国立中央博物館西大門刑務所歴史館に於いて資料収集を行い、十月一日帰国。

。古勝隆一准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二七日大阪発、東国大学校に於いて研究集会を行い、国立中央博物館西大門刑務所歴史館に於いて資料収集を行い、十月一日帰国。

。曽布川寛教授（東方学研究部）は、九月二二日大阪発、故宮博物院、チベット自治区博物館等に於いてチベット佛教美術の調査及び資料収集を行い、十月二日帰国。

。池田巧准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二五日大阪発、黒龍江大学に於いて第四〇回国際漢蔵言語学会に参加、中央民族大学に於いてチベット系諸語に関する資料収集を行い、十月三日帰国。

。加藤和人准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月三十日成田発、Ontario Institute for Cancer Research に於いて国際がんゲノミクスコンソーシアム第一回運営会議に参加し、十月四日帰国。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、十月四日大阪発、ワシントン大学に於いて「アジアにおける宗教・エスニシティ」シンポジウムに参加し、十月九日帰国。

。大浦康介教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月一日大阪発、EHESS（社会科学高等研究院）等に於いてフィクション研究に関する研究打合わせ及び資料収集を行い、十月十一日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、受託研究費により、十月二日大阪発、国立シンガポール大学に於いてシンガポールの環境政策についての文献収集を行い、十月十三日帰国。

。稲葉穣准教授（東方学研究部）は、九月二六日大阪発、国立歴史博物館、ペンジケント遺跡等に於いて中央アジア仏教関連遺物調査を行い、十月十九日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月十四日大阪発、Institute of Oriental Studies, St. Petersburg Branch, Russian Academy of Sciences に於いて敦煌写本ほか中国文献の調査研究を行い、十月二二日帰国。

。池田巧准教授（東方学研究部）は、十月十六日大阪発、Univ. of California に於いて東アジア図書館開館式典に参加し、十月二二日帰国。

。加藤和人准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月二一日大阪発、San Diego Mar-

riott Hotel&Marina に於いて Public Population Project in Genomics Meeting に出席、San Diego Convention Center に於いて米国人類遺伝学会に出席及び資料収集を行い、十月二七日帰国。

。山崎岳助教（附属漢字情報研究センター）は、十月二六日大阪発、中央研究院、東呉大学、暨南国際大学に於いて「グローバル化の下の明史研究の新視点」学会に参加し、十月三一日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、十月三十日大阪発、メリーランド大学に於いて国際会議に出席し、十一月五日に帰国。

。高木博志准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月一日大阪発、ハーバード大学に於いて国際シンポジウム「日本仏教の研究」に参加、報告及びライシャワー日本研究所の研究会へ参加、ピーポディ・エセックス博物館等に於いてE・モース関係の調査を行い、十一月五日帰国。

。齋藤智寛助教（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月一日大阪発、フランス国家図書館に於いて敦煌出土文書の調査を行い、十一月八日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、受託研究費により、十一月六日大阪発、シンガポール国立大学に於いて都市の環境問題についてのデータ収集を行い、十一月十七日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、十一月十日大阪発、蘭州大学敦煌学研究所に於いて敦煌写本に関する講演と調査を行い、中国国家図書館に於いて二一世紀COE外部評価打合せを行い、十一月十八日に帰国。

。王寺賢太准教授（人文学研究部）は、十一月十九日大阪発、成均館大学及びソウル国立大学に於いて講演及び研究発表を行い、十一月二二日帰国。

。坂本優一郎助教（人文学研究部）は、十一月十六日成田発、ケンブリッジ大学図書館ナショナル・アーカイヴズに於いて十八世紀イギリスにおける社会的間接資本整備の史料調査を行い、十一月二三日帰国。

。冨谷至（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、十一月十六日大阪発、華東師範大学に於いて学術講演会に出席、上海博物館に於いて書写材料に関する調査を行い、十一月二九日に帰国。

。石川禎浩准教授（現代中国研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月二十日大阪発、陝西省档案館及び西北大学社会科学系に於いて中国社会主義運動に関する資料調査及び学術講演及び研究打合わせを行い、陝甘寧革命記念館に於いて中国社会主義文化に関する資料調査、中共中央旧址記念館等に於いて中国社会主義運動に関する資料調査を行い、十二月二日帰国。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部他経費）により、十一月二八日成田発、マリオットホテルに於いてアメリカ人類学会参加、ニューヨーク州立大学に於

いてアジア系アメリカ人へのインタビュー及び国際シンポジウム打合せと資料収集を行い、十二月七日帰国。

。岩井茂樹教授（東方学研究部）は、十二月二日大阪発、中山大学及びオランダ総領事館に於いて International Conference : CANTON AND NAGASAKI COMPARED 一七三〇―一八三〇に参加、学術報告を行い、十二月八日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、受託研究費により、十二月五日大阪発、コロンボ大学に於いて被災地の環境問題についてのデータ収集、研究者との交流を行い、シンガポール国立大学に於いて都市における環境問題についての資料収集を行い、十二月十九日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月二五日大阪発、ソウル市内に於いて戸籍（除籍簿）調査に関する打合せを行い、国立中央図書館に於いて族譜調査を行い、十二月二八日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇八年一月九日大阪発、マドラス大学、シャクティ寺院、エグモア地区に於いて文化接触についての資料収集及び調査を行い、SNDT大学に於いてイスラーム女性についての資料収集を行い、二〇〇八年一月二八日帰国。

。田中淡教授（東方学研究部）は、二〇〇八年一月十六日成田発、台湾大学に於いて中国建築史・美術史研究の情報交換等、故宮博物館に於いて中国建築・生活空間・美術に関する研究史料蒐集、美濃鎮聚落・古建築群に於いて中国農村聚落・民居の調査と生活習俗に関する資料蒐集を行い、二〇〇八年一月二十日帰国。

。小池郁子（人文学研究部）は、受託研究費により、二〇〇八年一月十八日大阪発、ダーラビ地区に於いて都市開発と環境問題についての調査を行い、マプサ地区に於いて多文化共生と環境問題についての調査を行い、二〇〇八年一月二六日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、二〇〇八年二月十四日大阪発、中華仏学研究所に於いて EBTI after 15 and CBETA at 10 Years : Joint International Conference on Digital Buddhist Studies に出席、二〇〇八年二月二十日帰国。

。藤井正人教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇八年二月十六日大阪発、Sarasvati Bhavana Library に於いてヴェーダ写本の調査を行い、二〇〇八年二月二五日帰国。

。岡田暁生准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇八年二月二十日大阪発、十九世紀音楽雑誌の調査を行い、二〇〇八年二月二七日帰国。

。籠谷直人教授（人文学研究部）は、受託研究費により、二〇〇八年三月二日大阪発、香港中文大学に於いてワークショップ "Empires, Networks, and Global Governance : Dialogues with Japanese Scholars" 参加及び研究資料調査を行い、二〇〇八年三月六日帰国。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方

負担）により、二〇〇八年三月一日大阪発、カリフォルニア大学、スタンフォード大学、カリフォルニア大学ロサンジェルス校、ポモナ大学に於いて表象理論に関する研究打合せ等を行い、二〇〇八年三月十三日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、二〇〇八年二月二四日大阪発、コロンボ大学に於いて宗教マイノリティの研究を行い、二〇〇八年三月十三日帰国。

。立木康介准教授（人文学研究部）は、二〇〇八年三月六日大阪発、Ecole Normale Supérieure に於いて「精神分析運動の歴史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で捉え直す試み」のための資料収集を行い、二〇〇八年三月十四日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇八年三月十一日大阪発、チェジュ大学校、チェジュ市近郊、ソウル市内に於いて植民地期戸籍（除籍簿）の調査を行い、二〇〇八年三月十五日帰国。

。池田巧准教授（東方学研究部）は、受託研究費により、二〇〇八年三月十六日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて現代中国の言語社会に関する資料収集及び研究打合せを行い、二〇〇八年三月十九日帰国。

。曾布川寛教授（東方学研究部）は、二〇〇八年三月十六日大阪発、国家文物局、西蔵自治区博物館、ポタラ宮、薩加寺、夏魯寺に於いてチベット佛教美術に関する現地調査、資料蒐集を行い、二〇〇八年三月二二日帰国。

。田辺明生准教授（人文学研究部）は、受託研究費（一部先方負担）により、二〇〇八年三月十六日大阪発、ティンプーに於いてブータンにおける民主化・環境政策・世代間対立について、フィールド調査及び情報収集を行い、二〇〇八年三月二九日帰国。

外国人研究員

。斉　東方　北京大学考古文博院教授
ソグクド移民と外来美術
（文化生成研究客員部門）
受入教員　曽布川教授
期間　八月十六日～
二〇〇八年二月十五日

。BREEN, John　ロンドン大学准教授
日吉大社の社会史：近世から近代へ
（文化連関研究客員部門）
受入教員　高木准教授
期間　八月十九日～
二〇〇八年二月十八日

。XIFARAS, Mikhaïl Dorel　オレルアン大学法学部教授
法とフィクション
（文化生成研究客員部門）
受入教員　大浦教授
期間　二〇〇八年二月十六日～
二〇〇八年八月十五日

。桑　兵　中山大学歴史系教授
近代中日学術交流史
（文化連関研究部門）
受入教員　森教授
期間　二〇〇八年二月十九日～
二〇〇八年八月十八日

招聘外国人学者

。ESPOSITO, Monica
道蔵輯要の研究
受入教員　麥谷教授
期間　二〇〇六年四月一日～

二〇〇八年三月三一日（継続）
。SMITH, Henry　コロンビア大学東アジア学科教授
日本近代建築史論、講談及び浪曲における赤穂浪士
受入教員　高木准教授
期間　二〇〇六年七月一日～
二〇〇八年八月二四日（継続）
。VOGELSANG, Kai　ミュンヘン大学ハイセンベルグ特別研究員
Studies in the textual and literary criticism of the Tso-chuan (c. 4th c. BC)
受入教員　ウィッテルン准教授
期間　二〇〇六年十月一日～
二〇〇八年三月三一日（継続）
。崔　佑吉　鮮文大学校国際学部副教授
在日・中国朝鮮族：実態、生活世界・アイデンティティ
受入教員　金教授
期間　四月一日～
二〇〇八年二月二十日
。KARP, Sergey　ロシア科学アカデミー世界史研究所一八世紀研究センターセンター長
二十世紀ロシアにおける「啓蒙」の理念と実践についての系譜学的研究
受入教員　王寺准教授
期間　五月六日～五月二一日
。黄　蘭翔　中央研究院臺灣史研究所・副研究員
東アジアにおける禅宗伽藍の特徴と伝播
受入教員　田中淡教授
期間　六月七日～九月十四日
。王　汎森　中央研究院歴史語言研究所・特聘研究員
清代嘉道咸時期的思想
受入教員　森教授
期間　七月一日～八月三一日
。都　賢喆　延世大学校文科大学史学科副教授
高麗後期性理学者の日本観
受入教員　矢木准教授
期間　九月三日～
二〇〇八年八月三十日
。陳　鴻森　中央研究院歴史語言研究所
傅斯年図書館主任
清代学術研究
受入教員　井波教授
期間　九月十五日～十月十五日
。余　欣　復旦大學歴史學系副教授
日本所藏博物學漢籍研究
受入教員　高田教授
期間　九月二五日～
二〇〇八年九月二四日
。高　啓安　蘭州商学院教授
中国におけるシルクロード飲食文化の研究
受入教員　高田教授
期間　十一月二十日～
二〇〇八年十一月十九日
。鞏　文　中国社会科学院考古研究所副研究員
三～六世紀の装身具からみた東アジアの文化交流
受入教員　岡村教授
期間　十二月六日～
二〇〇八年三月四日
。黄　仕　忠　中山大学教授
日本蔵中国戯曲の文献学的研究
受入教員　金教授
期間　二〇〇八年二月十五日～
二〇〇八年三月十五日
。蔡　榮婷　中正大学中国文学系教授

宋代禪宗叙事文学研究
受入教員　高田教授
期間　二〇〇八年二月十八日～
二〇〇八年八月二十日
。関　暁紅　中山大学歴史系教授
清末官制改革についての研究
受入教員　石川准教授
期間　二〇〇八年二月十九日～
二〇〇八年八月十八日
。BREEN, John　ロンドン大学准教授
日吉大社の社会史：近世から近代へ
受入教員　高木准教授
期間　二〇〇八年二月十九日～
二〇〇八年七月三一日

外国人共同研究者

。ESPESSE, Gregoire　中央研究院歴史語言研究所研究員
道教史における『太平経』の再評価
受入教員　麥谷教授
期間　二〇〇六年四月一日～
二〇〇八年三月三一日（継続）
。韓　燕麗
海外華人による文学・映画作品に関する研究
受入教員　金教授
期間　二〇〇六年四月一日～
二〇〇八年三月三一日（継続）
。SANFT, Charles Theodore
中国前漢時代の礼と法をめぐる学術思想
受入教員　冨谷教授
期間　二〇〇六年四月十日～
二〇〇八年四月九日（継続）
。金　麗實
植民地期在満朝鮮人の生活・文化・ナショナルアイデンティティー
受入教員　水野教授
期間　二〇〇六年四月十五日～
二〇〇八年二月二九日（継続）
。SCHERRMANN, Sylke, Ulrike
青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資料の調査
受入教員　岩井教授
期間　二〇〇六年十月一日～
二〇〇八年三月三一日（継続）
。AUGUSTINE, Matthew
朝鮮・沖縄からの越境と日本の境界変貌
受入教員　水野教授
期間　四月一日～五月二五日
。黄　稔恵　台湾・明道大学日本語学科専任講師
植民地時代の台湾における日本民俗芸能文化の浸透と展開
受入教員　籠谷教授
期間　八月一日～八月三十日
。李　丹丹
琉球官話課本語言及清代南方対外漢語教学研究
受入教員　池田准教授
期間　八月十日～
二〇〇八年二月九日
。王　萌
近代上海における日本人と日本企業
受入教員　籠谷教授
期間　九月十五日～
二〇〇八年九月十四日
。趙　成雲
植民地朝鮮における日本視察団の派遣に関する研究
受入教員　水野教授
期間　二〇〇八年一月十五日～
二〇〇九年一月十四日

外国人研究生

。SOLOMON, Deborah
一九二九年光州学生運動
受入教員　水野教授
期間　二〇〇五年七月一日～
二〇〇七年八月三一日（継続）

。SHENDEROVICH, Esther
国際関係における明治期日本の自己表現
受入教員　高木准教授
期間　二〇〇六年四月一日～
二〇〇八年三月三一日（継続）

。朴　眞煥
韓国における良心的兵役拒否を通して見る韓国社会の徴兵制についてのディスコース研究
受入教員　田中雅一教授
期間　二〇〇六年四月一日～
二〇〇八年三月三一日（継続）

。常　雪鷹
日中古典文学の比較研究
受入教員　金教授
期間　二〇〇六年十月一日～
二〇〇九年九月三十日（継続）

。BENJAMIN, Boas
日本における麻雀についての研究
受入教員　田中雅一教授
期間　十月一日～
二〇〇八年九月三十日

。査　娜
東アジア経済史
受入教員　石川准教授
期間　十二月一日～
二〇〇八年二月二八日

漢字情報研究センター講習会

。二〇〇七年度漢籍担当職員講習会（初級）
第一日（十月一日）
オリエンテーション　森　時彦
漢籍について　井波陵一
カードの取り方―漢籍整理の実践　永田　知之
第二日（十月二日）
工具書について　高井たかね
漢字目録カード作成実習
第三日（十月三日）
目録検索とデータベースの検索　安岡孝一
漢籍データ入力実習（一）
第四日（十月四日）
和刻本について
慶応義塾大学准教授　高橋　智
漢籍データ入力実習（二）
第五日（十月五日）
実習解説　梶浦　晋
朝鮮本について　矢木　毅
情報交換・質疑応答　井波陵一

。二〇〇七年度漢籍担当職員講習会（中級）
第一日（十一月五日）
オリエンテーション　森　時彦
経部について　古勝隆一
叢書部について　山崎　岳
叢書と漢籍データベース　安岡孝一
第二日（十一月六日）
史部について　宮宅　潔
漢籍データ入力実習（一）
第三日（十一月七日）
子部について　武田時昌
漢籍データ入力実習（二）
第四日（十一月八日）
集部について
人間・環境学研究科准教授　道坂明廣

漢籍データ入力実習（三）
第五日（十一月九日）
実習解説　梶浦　晋
現代中国書について
神戸大学大学院人文研究科准教授　濱田麻矢
情報交換・質疑応答　井波陵一

お客さま

四月三日　台湾成功大学文学院代表団十三名（金、水野、石川が対応した）
四月五日　台湾国科会代表団八名（金、岩井、ウィッテルン、石川、古勝が対応した）
四月六日　華東師範大学法政学院教授周　尚文他一名（森、石川が対応した）
七月十三日　復旦大学歴史系教授　章清（森、岩井、石川、山崎が対応した）
十月十九日　麗江古城訪日団麗江市古城区委員会書記　周　鴻他十名（森、石川、袁が対応した）
十月二三日　中国社会科学院経済研究所現代経済研究室主任　武　力他三名（森、岩井、石川、袁、山崎が対応した）
十一月十日、十一日　台湾中央研究院歴史語言研究所研究員　李　孝悌　他十二名（金、岩井、高木、岩城、山崎、高井が対応した）
二〇〇八年二月二九日　逢甲大学人文社会学院院長謝　海平他五名（高田、古勝、齋藤、永田が対応した）

漢字情報学は構築できたか

安岡孝一

二〇〇四～七年度にかけて、足かけ四年間「漢字情報学の構築」共同研究班をおこなってきた。共同研究の詳細な報告は『東方学報』の次号あたりに譲るとして、ここでは、理系だか文系だかわからないこの不思議な共同研究班の実態について、少しだけ記録にとどめておこうと思う。

この共同研究班を運営していくに際して、班長である私が最初に決めたのは、紙のコピーをできるだけしない、という方針だった。地球にやさしく、などという意図は全くなかった。私の性格では、紙のコピーだと、どれが部屋のどこにあるのか、すぐわからなくなってしまうのだ。でも、スキャンした画像ファイルなら、日付をフォルダ名にして保存しておけば、とりあえず見つけやすい。さらにＨＴＭＬで表紙ページを作って、そこから全部リンクしておけば、なくさずに済む。そんなわけで、この共同研究班では、紙の資料はとりあえず全部スキャンして、ＤｊＶｕかＰＤＦで保存しておくことにした。

月二回の研究会では、各人がノートパソコンなり何なりを持ち込んで、これらのスキャンした資料を見ながら議論するというやり方が、非常に効果的だった。スキャンした資料ならば、事前に配布する必要もなく、漢字情報研究センターのＷＷＷサーバにでも置いておき、無線ＬＡＮ経由で、その場で見てもらえばいいのだ。また、新しい資料が出てきたら、それもその場でスキャンして、即座にＷＷＷサーバに置く。プログラムのたぐいであれば、ＣＧＩ化してＷＷＷ上で動くようにするか、実行結果をＷＷＷ上に置くことにした。

このような形で、足かけ四年間に渡って、「漢字情報学の構築」文献ログ、というＷＷＷページが構築された。約百五十種類の文献やプログラムが、共同研究班で取り上げた日付順に保存されている。しかもこのＷＷＷページ、本来は内部だけのつもりだったのが、他大学の班員からも見えるようにする過程で google に捕まってしまい、インターネットじゅうに公開されてしまった。著作権法第三十五条が適用されるかどうか、判断の分かれそうなケースなので、正直、悩ましいところだ。

では、こういう形でインターネット上で資料がやりとりできれば、共同研究それ自体もインターネット上

でおこなえるようになるのだろうか。たとえば電子掲示板や wiki を使えば、共同研究での議論もインターネット上に持ち込めるのだろうか。この点に関しては、残念ながら、私は非常に懐疑的にならざるを得ない。その理由の一つが、プロジェクタの存在だ。

月二回の研究会では、プロジェクタと長めのケーブルを準備しておくのが、常になっていった。各人のノートパソコンを、必要に応じて壁に投影できるようにするためだ。議論の途中で、他の班員が資料のどこをどう見ているのか知りたい、ということがしばしばあるので、「ちょっとそれどこどこ、見せてよ」と言いながら、相手にケーブルを渡すのだ。ケーブルを渡された方は、自分のパソコンの画面をプロジェクタで壁に投影し、見ていたあたりをマウスポインタでグリグリする。そして、研究会の参加者全員がそれを見る。多少大仰な言い方をするならば、壁に投影されたノートパソコンの画面は、その班員の思考過程の一部が晒け出されたものであり、その思考過程を他の全員が同時に同期して壁から受け取っている、ということだ。こんなの、現時点のインターネット上じゃ無理だ。

ただし、共同研究での議論を、インターネット上にもちこめない理由は、少なくともう一つある。それはもちろん「カンパーイ！」だろう。その点では、この共同研究班が火曜日の午前中だったのは、班長の私の性癖からすると、非常に不幸なことだったと言えるかもしれない。

二十世紀中国の社会システム

森時彦

過去百年の間に中国社会はどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのか、このような素朴な問いに対し、政治、経済、社会、文化などの分野でそれぞれの解答を模索することをめざしてこの共同研究班ははじまった。

班の一員としてわたしは、河北省南部、滏陽河のほとりに位置する新河県という小さな農業県を対象にとりあげた。その理由は、五四時期の北京大学で歴史学を学んだ傅振倫という学者が民国一七年（一九二八）に編纂した『新河県志』に、一八七五年と一九二五年とちょうど半世紀を隔てた自然村毎の戸口データが村

図とともに記録されていたからである。中国では清末から民国期にかけての時期に自然村単位の戸口が判明する例はきわめて稀である。新河県では一八七五年には一一、四六〇戸、六一、九五六人が一七六の自然村に暮らしていた。一九二五年には一八、三九三戸、八七、八八六人が一七五の自然村に住んでいた。さらに二〇〇〇年に出版された『新河県志』には、一九八八年の戸口は三四、一〇一戸、一三七、三五八人であるが、自然村はやはり一七五と記されている。多少の出入りはあるものの、一八七五年から一九八八年までの一一三年間新河県の自然村数は一村減とごく微少な変化しか示していない。戸口の増加は村落規模の拡大が吸収したことになる。

不動の自然村は、しかし一方で大きな戸口変動をともなっていた。自然村毎の戸口動態を総合すると、一八七五年から一九二五年にかけての半世紀間には、滏陽河沿いの西北部からやや高台になっている東南部への戸口移動が顕著であった。この時期、毎年のように滏陽河が氾濫し、低地の西北部がとくに被害が大きかったこと、清末から天津を集散地として綿花の商品流通が拡大するにつれ、綿花栽培に適した土壌の東南部が労働力を引きつけたことなどが重なって生じた現象と考えられる。逆に一九二五年から一九八八年までの六三年間には、東南部から西北部への戸口回帰が観察される。一九四九年以降、滏陽河の大規模な治水工事が行われた結果、穀物生産に適した肥沃な土壌の西北部が洪水の恐れから解放され、戸口を引き戻すことになったものと思われる。

さらに新河県内を東南から西北にかけて斜めに横切る「青石高速道路（青島―石家荘、さらに銀川に至る）」に、二〇〇六年菜園インターチェンジが設けられ、その近くに工業団地が造成されている。この農村工業化がもし順調に進展した場合には、どのような戸口変動がもたらされることになるのか、まだしばらく新河県から眼を放すことはできない。

南アフリカ、アイルランド、第一次大戦

小関　隆

ミステリー好き（私自身はそうではないが）にとって、アースキン・チルダーズの名前は馴染み深いものかもしれない。チルダーズが発表した唯一の小説、一九〇三年刊のベストセラー『砂洲の謎』は、スパイ小説というジャンルの確立に大きく貢献したと評される。今読んでもなかなかおもしろいこの海洋アクション小説には、ドイツ海軍が策すイギリス侵略に備えよ、との明瞭な政治的・軍事的メッセージが込められていて、防衛態勢の強化を訴えるベストセラー作家の声は海軍省に対してある程度の影響力を行使したらしい。チルダーズは第二次南アフリカ戦争（ボーア戦争）の際に志願して戦地に馳せ参じた人物でもある。熱烈な帝国礼賛論者だったといってよいだろう。そんなチルダーズだが、やがて母の故郷アイルランドのナショナリズムに入れあげて庶民院書記官の職を辞し、一九一四年には得意のヨットでナショナリストの義勇軍の武器密輸に協力する。最終的に到達するのはIRA強硬派という立場であり、かつての同志たちが構成するアイルランド自由国政府と激しく対立した結果、一九二二年に銃殺刑に処されることとなる。

南アフリカ戦争経験者をもう一人登場させよう。オーストラリア生まれのアイルランド人、アーサー・リンチである。彼が南アフリカに赴いたのは、チルダーズの場合とは違って、イギリス軍の一員としてではない。イギリス帝国主義に抗うボーア人と連帯すべく、第二アイルランド旅団なるものを組織し、ボーア軍の指揮下で戦闘に従事したのである。形式的にはイギリス臣民であるから、これは国王への大逆に他ならず、実際、イギリスに入国しようとして逮捕され、一九〇三年には死刑判決を受ける。しかし、リンチは一九三四年まで生き長らえる。恩赦を受けたうえでアイルランド選出の庶民院議員（ナショナリスト穏健派の立場で）を務め、一九一八年に議席を失って以降は医師として暮らした。また、詩、小説、批評、心理学、物理学、時論、アイルランド史、等々、なんでもござれとばかりに夥しい数の本を刊行してもいる。代表作と自負したのは一九三二年刊の『アインシュタインへの反論』（相対性理論を批判する内容のもの）、しかし、高い評価を得た本は一冊もない。文筆家としての名声という点ではチルダーズとはまったく比較にならないわけだが、マッド・サイエンティストと呼びたくなるほどの多芸多才ぶりは圧倒的である。

そして、いずれも落差の大きい人生を歩んだ二人に共通するのが、第一次大戦にあたってイギリス軍に志願入隊したことである。開戦直前に武器密輸に加担したチルダーズ、大逆の罪で死刑判決を受けたリンチ、二人とも国王への忠誠を誓い、軍服に身を包んだので

ある。なぜ、という問いを検討する紙幅はないが、このあたりにアイルランドにとっての大戦経験を考えるための有益な手がかりが隠されているように思われてならない。

助手班考

菊地　暁

「人文研探検」班などという奇妙な共同研究を始めたのは、単に魔が差しただけといえばその通りなのだが、誤解を恐れずにいえば、さまざまな誤解や憶説にまみれた人文研、印象論や理想論で語られがちな共同研究を、できるだけ具体的な資料に即して実態を考えたいと思ったからだ。

その誤解や憶説にまみれた事柄の一つに「助手班（助教班）」がある。「助手班」の存在に対して一部に不満があるよう仄聞するが、今後のことはさておきこれまでの事実関係だけを述べると、助手班の存在も、助手（助教）の研究班組織権も、正規の手続きを経て認められたものである。

ことの起こりはいわゆる学園紛争だった。紆余曲折を省略して結果だけ述べると、助手が一個の独立した研究者であることを認められ（それゆえ「班」の助手ではなく「部」の助手とされる）、新たに設置された「研究者会議」は助手を包含するものとなり、さらに、所内の意見交流を活性化するために所報『人文』が創刊（一九七〇年）される。助手班すなわち助手の研究班組織権は、こうした一連の流れのなかで正式に認められたものなのである（このことは『人文科学研究所五十年』ならびに『京都大学百年史』に明記されている）。

そんなわけだったので、助手班を発足させることだけは決まっていたが、何をどう研究するのかは決まっていない、という奇妙な状況からのスタートだったという（樺山紘一氏談）。結局、西洋部助手だった藤岡喜愛を班長として日本部・東方部・西洋部の助手が結集し、「現代における知識の意味」班（一九六九～一九七四）が発足した。これが初代助手班である。

初代助手班については、元助手・樺山紘一氏が所報『人文』の七〇周年記念号（四六号　一九九九年）に「藤岡班長、ありがとう」という一文を寄せている。

当時の研究班の様子を彷彿とさせる名文だが、なかでもとりわけ目を引くのが、共同研究の人間関係は、「当事者がみな水平関係だと自覚、もしくは誤解しているときだけに有効なのだ」という一節である。至言である。そして、現在、そうした「自覚、もしくは誤解」をどれだけ実現できているのか、自問せずにはいられない。

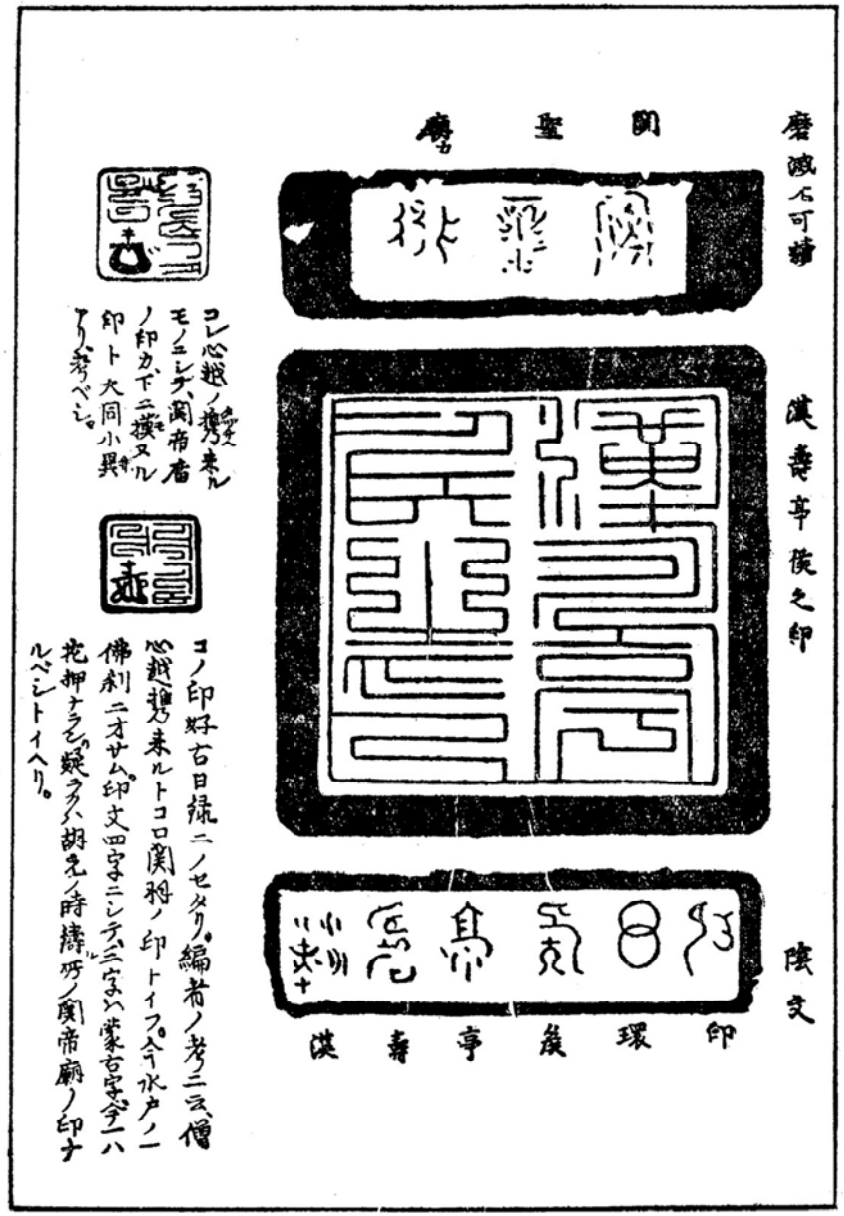
先の一節に続けて氏は、「いまの人文研に、助手共同研究班があるのかどうか知らないが、この原則が適用できる場所を保存してほしいと願う」と述べている。私もまた、そのように願わずにはいられない。

滝沢馬琴とパクパ字印

宮　紀子

京都五山は建仁寺両足院の調査で、元刊本や五山版のみならず、抄物をみる機会が増えたせいか、さいきん、室町～江戸時代の日本の資料が妙に気になる。読本作家の曲亭馬琴（クルワノマコト）、そのあて字の由来が馬頭琴などとはいうまいが、じつはかれ、モンゴルとそれなりのご縁があった。代表作の『八犬伝』が『水滸伝』をもとに書かれたのは有名な話だが、多分に漏れず『三国志』のファンでもあり、明の万暦年間に福建で刊行された全頁挿絵入りの余象斗本を愛読していた。『西遊記』とあわせ、じつに中国四大小説の三つまでもがモンゴル時代にほぼその体裁を整えており、荒唐無稽な『花関索伝』もこの時代の産物にほかならない。とうじ編まれた象棋の『玲瓏玄機』にも、「千里独行」「関公照鏡」といった関羽ネタから「三気周郎」「武松過岡」「武大挑担」と、何やらゲームソフトみたいな譜が並ぶ。

馬琴は、随筆『燕石雑志』で「漢雲長［附］漢寿亭侯」「関羽印の追考」なる項を設け、そのオタクぶりの一端を示す。すなわち、建仁寺の住持、古澗慈稽が一六一七年におこなった『三体詩』の講義の抄物によれば、足利義満が大明国から取り寄せた関羽の像と印、高僧恕中無慍の文章（「混一疆理歴代国都之図」の原図のひとつ「広輪疆理図」を作った天淵清濬の師）が、京都は京極芝の薬師、大興寺に奉納されていた。これらは一六二八年の火災後、吉田神楽岡（！）の東北院に移された。そもそもこの「漢寿亭侯」の印、「伝国の璽」と同様、政権の都合にあわせてたびたび「発見」されるいわくつきのもので、『関王事蹟』には、一三一二年、仁宗アユルバルワダに献上されたときの図が載る。人文研にも明の天啓六年の「関帝環印図」の拓本があって、関羽の騎馬像と一四九〇年に揚州で河から浚ったという重さ二斤四両の印影が刻まれる。同様の拓本は、江戸時代に何枚も伝来、京都の旧家などで愛玩されていた。問題なのは、この印とともに掲げられた「関帝廟」の印と称するしろものふたつ。明の東皐心越禅師が将来し、水戸藩の仏刹に納めたという。パクパ字三文字と花押からなるのは、馬琴、『好古日録』の藤原貞幹の両人とも、さすがに認識していたが、和刻本の『事林広記』を見れば事足りるのに、解読しなかった。従来から江戸の漢学者のレヴェルの高さが盛んに喧伝されるが、率直にいって南北朝期の



五山の坊さんには遠く及ばない。僧たちの「知」も、応仁の乱あたりからガクンと落ちた。むろん明の文化の荒廃が背景にあるのだが、鰯の頭も信心からとはいえ、モンゴル時代の江南文人「Džiw·□k'eu（鄒□屈？）」「Bi·śewli（畢守礼？）」の私印をいくら拝んでもご利益はなかったろうに、心越はいったい、いくらぼられたのだろうか。

ブータン訪問記

田辺明生

二〇〇八年三月二〇日から二八日までブータンを訪問する機会に恵まれた。現在ブータンは「王からの贈り物」と言われる上からの民主化を進めている。新憲法のもとでは「民主的立憲君主制」なるものが定められるという。要は代議制を伴う立憲君主制である。二〇〇七年一二月に国家評議会（上院）選挙があり、二〇人の議員が選ばれたが、そのなかのひとりに京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（AA研究科）博士課程院生のソナム・キンガさんがいた。キンガさんの博士論文のテーマはブータンの民主化についてであり、まさに渦中の参与観察である。

今回の訪問では、キンガさんの案内で三月二四日の国民議会（下院）選挙を観察した。AA研究科の藤倉達郎さんと人文研研修員の宮本万里さんとも同行した。時期が時期だけに、どこに行っても選挙のことで話はもちきりで、新体制への移行に際して国中が沸き立っているような感があった。人々が真剣に国のあるべき姿を議論しあい、その意見が実際に国づくりに反映されている姿をみて少しうらやましい思いがした。しかもそうした国づくりに参加しているほとんどの人が若い三〇代から四〇代だ。

キンガさんの元の職場で宮本さんの留学先であったブータン研究センターでは、所長のカルマ・ウラ氏と懇談する機会を得た。ウラ氏は国王のブレーンの一人であり、後に知ったことだが、国家評議会の勅任議員となることが決定している。ウラ氏とは、ブータンが提唱する「国民総幸福」Gross National Happiness について議論した。これは、先代国王が「国民総生産」に代えて提言したものであり、ブータンの国是となっている。正直に言って、ブータンを訪問するまでは、GNHは理念先行の非現実的なものと思っていた

が、ウラ氏と議論して考えを改めざるを得なかった。この概念は、地域における価値や社会関係を基盤とした民主主義のありかたを考える上で、有意義な参照枠となっている。ばらばらな個人の投票が国家権力を正当化するのではなく、人間と非人間を含めた生命全体の関係性を基盤とするようなデモクラシーの可能性についてウラ氏と話がはずんだ。生きとし生けるものの総幸福を考えるならば、個人の権利のみではなく、生命のネットワーク全体の質向上を考える必要がある。これは現在のリベラル・デモクラシーの枠組みを考え直す上で有効な視点となりうるかもしれない。民主国家としてはまだ若いブータンの活気に触れて、新たな理想をつくりだすことのできるような研究の必要性について思いを新たにした。

なお国民議会選挙では、元AA研究科客員研究員のポーデル氏が当選し、文部大臣として入閣することが決まった。ブータンとのますますの学術交流が楽しみである。

東チベットの高原にて

池田巧

夏のチベットはお祭りの季節だ。近年は中国内地からの観光収入を当て込んで、年々規模が盛大になっている。高原の会場には、参加者の出身の村ごとにいくつものテントが張られ、人々は見物とピクニックを楽しむ。祭りは数日にわたって続き、お坊さんの読経のあと、歌や踊り、馬のレースなどさまざまな催しが行なわれる。それにしても今年はこんな盛大なお祭りが行われているとは思いもしなかった。自宅を訪ねたチベット人の友人も祭りの会場に行っていて不在だという。家族や知人どうしがこぞって乗り合いの車やトラクターで出かけていくので、街なかは閑散としていて、商店も閉まっているところが多い。

会場の草原は街はずれの標高五千メートルの峠を越えたところにある。車で二時間弱の道のりだった。真夏でも雪を頂く峠を越え、渓流が次第に流れを集めていく山路を下り、いくつかの尾根を回ると緑の平原が目の前に開けた。はるか遠くには冠雪した山々が連なり、見はるかす広大な草地が続く。鮮やかに輝くいく

つもの白いチベット式のテントが立ち並ぶさまは壮観だ。街道沿いの小さな集落が会場の入り口で、観光用の巨大な看板があり、ランドマークとなっている。看板の近くには食堂や雑貨店が数件あって、近隣の村々から集まってきた人々でごった返していた。片肌を脱いだチベット服の農民や着飾った遊牧民の女性たちもいれば、町で仕事をしているような背広姿もあり、ジーンズにダウンジャケットや皮ジャンといったアウトドアスタイルの若者も少なくない。

会場の入り口に設えた仮ゲートからは、昨夜来の雨でぬかるんだ轍と水たまりがテントのほうへと続いている。そのまま車で乗り入れようとしたところ、数台前方の車がぬかるみにタイヤを取られ、応援を求めてようやく脱出するまで長時間待たされる事態となった。4輪駆動車で来ているとはいえ、これでは草原のテントを車で訪ね歩くのは無理である。見わたしてみると、数キロに及ぼうかという広さの会場内には軽量のバイクと馬が行き交っていた。過去の経験では、小さな祭りの会場ならテントをいくつか訪ねて「誰々はいるかい？」と聞いて回れば、まず間違いなく知人を捜しあてることができた。しかし目の前に広がるテントは膨大な数だ。ここでどうやって友人を捜したらいいのか、途方に暮れそうになったとき、同行の運転手が「電話してみたらいいじゃないか」と言った。普段は人も住まない四千メートルの高原で？　驚いたことに表示は「圏内」。友人の携帯（それもＰＨＳ！）に電話が通じ、五分後に彼はバイクに乗って会場の入り口の看板の下に現れたのだった。それにしてもこの山の中の高原をカバーするには、どれほど強力な電波と通信設備が使われているのだろう。見えないものへの驚異と脅威の感覚が混じりあう。

これまで通過して来た街々では、チベットのお坊さんが僧服の袖や腰から「手機」を取り出す姿を何度か目にしていた。経典を買いに来たらしきお坊さんが購入する仏典の書名を携帯電話で確認していたこともあった。チベット語で電話はカパルという。カは口、パルは写真、「口で伝える写真」という何とも粋な意味構成の単語だ。インフラ整備が進んで町から周辺の農村部まで電波が届くようになると、固定電話の引けない地域でも電話が使えるようになり、5千メートルを超える峠を挟んで、あるいは複雑な僧坊や寺院の内部でも文字通りいつでもどこでも連絡が可能になった。この自由さは遊牧民の生活環境や習慣によく適合していたためか、この数年の間に携帯電話はチベットの辺境地域にまで急速に普及していき、通信インフラの整備は、辺境でこそ格段の利便性が共有できることを誰

もが目の当たりにすることになった。

しかし同時にこうした強力な経済政策は、純粋に現地の生活環境の向上が目的なのだろうか？　と疑念を抱くこともある。最近もチベット僧が携帯電話を所持していたというだけで逮捕され、国外の分裂主義者との通信を行なっていたと決めつけるかのような報道があって、過去の似たような事例が思い出された。私のチベット語の師匠は、修行僧としてラサに暮らしていた一四歳の春に騒乱がおこり、破壊者からこの寺を守るんだという師僧の指示で堂内に立てこもった。投降すると、ひとことの中国語もわからないまま叛乱分子と決めつけられて、十年に及ぶ労働改造に送られた。彼はそのとき、自衛の道具を持って寺に隠っていただけだったのに。一九五九年の出来事である。

それから約五十年、引退して四川省の山岳地帯の村に住む師匠もとうとう携帯電話を使うようになった。これで研究所から直接国際通話で連絡できるようになったと喜んでいたのだけれど…開放を加速するはずの技術革新と利便性の高度な発展が、亡霊のような閉鎖性までも呼び寄せるなんて誰が予想しただろう。

師匠には、まだ電話をしていない。

今村仁司と共同研究の作法

田中雅一

今村仁司氏が昨年五月五日に亡くなってほぼ一年になる。社会思想家としての今村の業績はよく知られているが、かれが一部の人類学者と長い間密接な交流を続けていたことは、あまり知られていない。

今村を人類学の世界に導いたのは、田辺繁治氏（国立民族学博物館名誉教授）の功績によるところが大きい。わたしは一九八六年八月に民博に就職したが、最初の公務出張は田辺氏らと上京し今村に会うことだった。研究会「文化的プラクティスとイデオロギー」の打ち合わせをするためである。今村は、その後二〇年間、田辺が民博で主催した研究会やシンポなどの常連としてわたしたちに刺激を与え続けてきた。今村はどの研究会にも欠席することもなく、また報告のあとに続く懇親会をだれよりも楽しみにしていた。

では、今村自身はどんな研究会を組織していたのだろうか。かれが組織した研究会の記録に『トランスモダンの作法』（一九九二）がある。その研究会のあり様を知ったときの衝撃は計りしれなかった。あまりに斬新だったからである。第一に人数である。この研究班を構成しているのは、今村を含め5名にすぎない。第二に報告の方法である。研究会は平均すると月一回、三年間に計三四回行われたが、一四回目から毎回全員が報告している。

この少数精鋭の研究班を軍事組織にたとえるなら、全天候・マルチタスク型の海兵隊ユニットである。これに対比されるのは、大規模なロジスティックスを背景に重装備で敵地に向かう陸軍大隊といえよう。人文系の研究プロジェクトも昨今の潮流はこの大隊化である。多額の予算を獲得し、全国から専門家を集め、若手を育成する。大々的にシンポを開催し、成果刊行で終了となる。

このようなプロジェクトから学ぶことは多いのはたしかだ。わたし自身、いくつかの大型プロジェクトによって鍛えられてきた。しかし、大型化が招く弊害も存在する。運営にあたって効率性を最優先することで、信頼できる仲間たちとともに時間をかけて学び、考えるという冒険的な楽しみ（と苦しみ）が忘れ去られてはいないだろうか。今村が組織した『トランスモダンの作法』がいまなおわたしを魅了してやまないのは、そこに学ぶことの楽しみを分かち合おうという共同研究会の原点が認められるからなのである。

書いたもの一覧

（氏名五十音順　◉は単行本）

浅原達郎

「尼」字の筆法　日古　九号　四月

池田巧

《西番譯語》に記録されたリュズ語　語学教育フォーラム十三　十月

書評　チベット語の歴史と羌系諸語の類型構造を鮮やかに描く論文集（黄布凡『蔵語蔵緬語研究論集』）　東方　三二四　二月

石川禎浩

思い出せない日付——中国共産党の記念日　小関隆編『記念日の創造』　人文書院　五月

Anti-Manchu Racism and the Rise of Anthropology in Early Twentieth Century China. Joshua FOGEL (ed.) *Crossing the Yellow Sea : Sino-Japanese Cultural Contacts 1600-1950.* EastBridge.　五月

Chinese Marxism and Japan in the Early Twentieth Century. Joshua FOGEL (ed.) *Crossing the Yellow Sea : Sino-Japanese Cultural Contacts 1600-1950.* EastBridge.　五月

李大釗早期思想中的日本因素——以茅原華山為例　社会科学研究　一七〇期　五月

関於孫中山致蘇聯的遺書　亜洲研究　五五期　七月

近代中国的〝文明〟與〝文化〟　日本東方学　一号　八月

李昇燁

書評：坂本悠一・木村健二著『近代植民地都市釜山』　朝鮮史研究会会報　第一六八号　七月

外務省の「外地人」官僚たち——朝鮮人・台湾人副領事特別任用制度を中心に　松田利彦編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚（国際シンポジウム第30集）』　国際日本文化研究センター　一月

伊藤順二

書評　南川高志編著『知と学びのヨーロッパ史　——人文学・人文主義の歴史的展開——』」『史林』第九一巻三号　三月

稲葉穣

書評　清水和裕著『軍事奴隷・官僚・民衆——アッバース朝解体期のイラク社会——』　東洋史研究　六五巻四号　三月

ヤカウラングとリバーテ・カルヴァーン——ハザーラジャー

ト北部の歴史地理――オリエント　五十巻一号　九月
ムスリム諸勢力の南アジア進出　小谷汪之編『南アジア史2』（世界歴史大系）　山川出版社　九月

井波陵一

◉紅楼夢と王国維　朋友書店　一月
使えない字――諱と漢籍　京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編『京大人文研漢籍セミナー1　漢籍はおもしろい』　研文出版　三月

岩井茂樹

《嘉靖四十一年浙江嚴州府淳安縣十八都下一圖賦役黄册殘本》的發現與初步考析　日本東方學　第一輯　八月
十八世紀前半東アジアの海防と通商――信牌問題と南洋海禁案から――　大阪市立大学東洋史論叢　別冊特集号「文献資料学の新たな可能性③」　十二月
宋代以降の死刑の諸相と法文化　冨谷至編『東アジアの死刑』　京都大学学術出版会　二月

岩城卓二

尼崎藩における大坂町触通達　塚田孝編『近世大坂の法と社会』　清文堂　九月
近世大坂地域研究の課題　経済史研究　一一　三月

ウィッテルン　クリスティアン

Mazu Daoyi, Reden und Aufzeichnungen-Yulu. Hans-Joachim Simm(ed.) Die Religionen der Welt. Ein Almanach zur Eröffnung des Verlags der Weltreligionen　四月

Pang Jushi, Reden und Aufzeichnungen-Yulu. Hans-Joachim Simm(ed.) Die Religionen der Welt. Ein Almanach zur Eröffnung des Verlags der Weltreligionen　四月

Aufzeichnungen von der Übertragung der Leuchte aus der Ära Jingde-Jingde chuandeng lu. Hans-Joachim Simm (ed.) Die Religionen der Welt. Ein Almanach zur Eröffnung des Verlags der Weltreligionen　四月
漢讀：新しいテキスト・モデルに基づいた東洋学文献研究支援ツール（共著）情報処理学会 研究報告 2007-CH-74　五月

Entrance Through the Scriptures : Catalogues and Electronic Text as a New Gate to the Buddhist Tradition. 中華佛學學報　七月

Digital Text, Meaning and the World : Preliminary considerations for a Knowledgebase of Oriental Studies. 東アジアにおけろ儀礼と刑罰　九月

Character Encoding. Ray Siemens / Susan Schreibman (eds.) Blackwell Companion to Digital Literary Studies　十二月

◉東アジアの宗教と文化 西脇常記退休記念論集 / Essays on East Asian Religion and Culture. Festschrift in honour of Nishiwaki Tsuneki on the occasion of his 65th birthday（共編）西脇常記退休記念論集編集委員会　十二月

Patterns of Variation : The Textual Sources of the Chinese Buddhist Canon as Seen through the CBETA Edition
ウィッテルン　クリスティアン／石立善（編）『東アジアの宗教と文化 西脇常記退休記念論集』西脇常記退休記念論集編集委員会　十二月

Lessons learned from the Knowledgebase of Tang Civilization project「漢字文化三千年」国際シンポジウム報告書　二月

Improving Findability : Faceted Search with Lucene, Solr and VUFind 東洋学くのコンピュータ利用第19回セミナー　三月

王寺賢太

啓蒙のための十章
第九章　ユーモアについて　京都新聞　四月三日
第十章　経験について　京都新聞　四月十日
ヴォルテール　松永澄夫編『哲学の歴史6　知識・経験・啓蒙』　中央公論新社　六月

Les failles des savoirs du droit et la vérité de l'histoire philosophique dans l'*Histoire des deux Indes* de G.-T. Raynal. Mikhaïl XIFARAS (ed.), *Généalogie des savoirs juridiques contemporains : le carrefour des Lumières*, Bruylant.　十二月

Civilisation et naissance de l'histoire mondiale dans l'*Histoire des deux Indes* de Raynal. *Revue de synthèse*, 2008 (1), Springer.　一二月

大浦康介

翻訳：ヤン・アペリ『ファラゴ』　河出書房新社　一月
国際シンポジウム成果報告書 Fiction de l'Occident, fiction de l'Orient（編著）　二月
書物の森／翻訳ほりだし物　東京新聞 三月六日（中日新聞 三月七日）

岡田暁生

◉恋愛哲学者モーツァルト　新潮選書　三月

岡村秀典

◉夏王朝 中国文明の原像　講談社学術文庫　八月
Art and Archaeology of the Western Regions and Han China. *Opening up the Silk Road, The Han and the Eurasian World.* The Silk Roads — Nara International Symposium 8　八月
雲岡石窟寺的考古学研究（共著）日本東方学 一　中華書局　八月
古代中国の栄華を伝える「殷墟」Newton 一七　十二月

漢字のはじまりと拡散　「漢字文化三千年」国際シンポジウム報告書　二月
◉北魏時代の平城と雲岡の歴史考古学的研究（編著）　科研費成果報告書　三月
◉遼東半島四平山積石塚の研究（共著）　柳原出版　三月
濱田青陵の中国青銅器研究　岸和田市文化賞濱田青陵賞二十周年記念誌　岸和田市・岸和田市教育委員会　三月

籠谷直人

帝国経済の対立と宥和――日印会商をめぐる日英印の三国関係（共著）、石田憲編『膨張する帝国、拡張する帝国』　東京大学出版会　四月
帝国のガヴァナンスと華僑ネットワーク（共著）、遠藤乾編『グローヴァル・ガバナンスの最前線と歴史』（日本学術振興会JSPS人文社会科学振興費研究事業成果報告書）　東信堂　一二月

加藤和人

ゲノムひろば二〇〇六報告書　特定領域研究ゲノム4領域（白井哲哉・加藤和人他編著）　二〇〇七年六月
Community engagement and informed consent in the International HapMap Project.（国際ハップマップコンソーシアムとして共同執筆）Community Genetics, 第十巻　六月
HUGO Statement on Pharmacogenomics（PGx）: Solidarity, Equity and Governance. ヒトゲノム国際機構倫理委員会、Genomics, Society and Policy, 第三巻　七月
社会のなかの幹細胞研究―生命倫理から科学コミュニケーションまで（川上雅弘と共同執筆）　蛋白質・核酸・酵素、第五十二巻　共立出版　八月
科学コミュニケーション―その変遷と多様性を考える（松田健太郎・森田華子と共同執筆）　蛋白質・核酸・酵素、第五十二巻　共立出版　十二月
iPS細胞・臨床応用へ動く―どうする生命倫理　日経産業新聞（インタビュー）　二月
研究現場に活かされるコミュニケーション活動をめざして―『ゲノムひろば』の実践と調査から（白井哲哉と共著）　蛋白質・核酸・酵素、第五十三巻　共立出版　三月
ゲノムひろば―研究者と社会の対話のための新しいスタイル　平田光司編『科学におけるコミュニケーション二〇〇七　総合研究大学院大学』　三月

菊地暁

「皿洗い論文」その後　出版ダイジェスト　二〇九三号　八月
『雲岡石窟』を支えるもの――京都・雲岡・サンフランシスコ――　10＋1　四八号　九月
『村と人間』という邂逅――農村クライマックスの行方――　10＋1　四九号　一二月
新書という公共圏――桑原武夫編『日本の名著』という企み――　10＋1　五〇号　三月

ニッポンの民俗写真、あるいは〈民俗学者〉としての写真家　写真空間　創刊号　三月
柳田国男編『採集手帖（沿海地方用）』――「京都帝国大学文学部国史研究室内　民俗調査会」寄贈図書から――　静脩　四四巻三・四合併号　三月

金文京

孔子の伝説〈孔子項托相問書〉考　説話論集　一六集　清文堂　七月
◉『至正條格』校註本（共編）　韓国学中央研究院　八月
◉元刊雑劇の研究――三奪槊・気英布・西蜀夢・単刀会（共著）　汲古書院　一〇月
東アジア比較文学の構想　和漢比較文学　四〇号　二月
東アジア近世知識人の一形態　東アジア文化交渉研究　別冊一号　三月

久保昭博

柔らかな背中の街　人文　五四号　六月
戦争小説の誕生と兵士たちの沈黙（インタビュー）　京都大学新聞　十一月一日
第一次世界大戦とモダニズム（日本フランス語フランス文学会ワークショップ報告）　学会ニュース　日本フランス語フランス文学会　百二七　十二月十五日
翻訳：ジャン・ボードリヤール『悪の知性』（塚原史との共訳）　NTT出版　三月
Le roman comme construction poétique : A propos de《Technique du roman》de Raymond Queneau. フランス語フランス文学研究　九二　三月

倉島哲

論文空間の社会学　西原和久・保坂稔編『グローバル化時代の新しい社会学』　新泉社　十一月
解説：書評に応えて　倉島哲『身体技法と社会学的認識』　ソシオロジ　五二巻三号　三月
解説：書評へのリプライ　倉島哲『身体技法と社会学的認識』　スポーツ社会学研究十六巻　三月

古勝隆一

血盟と師授――『抱朴子』内篇を中心として　麥谷邦夫編『江南道教の研究』（科学研究費補助金、研究成果報告書）　三月
北朝経学与『老子』　伝統中国研究集刊　第四輯　十二月

小関隆

◉記念日の創造（編著）　人文書院　五月
書評：河村貞枝・今井けい（編）『イギリス近現代女性史研究入門』　社会経済史学　七三巻一号　五月

齋藤智寛

中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館蔵「敦煌文献」漢文

部分叙録補　敦煌写本研究年報　創刊号　三月
それぞれの浄土　人文　五十四号　六月
二〇〇七年〝仏教文献与文学〟会議将於日本召開（池麗梅訳）二〇〇七敦煌學國際聯絡委員會通訊　九月

坂本優一郎
公債・年金・いのち　人文　五四号　六月

曾布川寛
龍門石窟北朝造像若干問題的探討（一）　中国佛教芸術　第一輯　南京大学出版社　二月
雲岡石窟の再検討—雲岡第一六窟・一三窟—　東アジアにおける宗教文化の総合的研究　佛教大学アジア宗教文化情報研究所　三月
唐代美術の普遍性とその由来　美学芸術学　第二二号　同志社大学美学芸術学会　三月

高木博志
資料翻刻・解題　大正七年五月畝傍地方修学旅行（奈良女子高等師範学校）記録　科研費研究成果報告書『近代大和地方のコレクション収集活動に見る「日本文化」形成過程の研究』（久留島浩研究代表者、国立歴史民俗博物館）三月
京都の桜、刻まれた歴史　朝日新聞（大阪本社、夕刊）　四月六日
近代日本と豊臣秀吉（朝鮮文）『壬辰倭乱——東アジア三国戦争』（鄭杜熙他編、西江大学校国際韓国学センター企画）ヒューマニスト社（ソウル）十二月
回顧と展望・「大衆文化・モダニズム・文化統制」（『新札幌市史』通史四第九章）再読感想　札幌の歴史　第五四号　二月
札幌市教育委員会
◉みやこの近代（共編）　思文閣出版　三月

高階絵里加
花を詠う、花を描く——文学・美術の中の花——『人はなぜ花を愛でるのか』　八坂書房　二〇〇七年三月
◉科学研究費補助金研究成果報告書『日本近代美術における「和」と「洋」の諸問題』　五月
日本経済新聞・展評欄　四月二四日、五月十日、七月二六日、九月十三日、十月三十日、十一月二九日、一月二四日、二月二一日
栖鳳と絵画の革新　丸山宏・伊従勉・高木博志編『みやこの近代』　思文閣出版　三月

高田時雄
李滂と白堅——李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景　敦煌寫本研究年報　創刊號　三月
尾崎雄二郎教授を悼む　東方學　一一四輯　七月
金楷理傳略　日本東方學　一輯　北京　中華書局　八月
◉唐代宗教文化與制度（編）　京都大學人文科學研究所　九月
最近の日本に現れた敦煌吐魯番關連の書物數點　敦煌學國際

連絡委員會通訊二〇〇七　上海古籍出版社　九月
悼念福安教教授　敦煌吐魯番研究　十　九月
非漢字から見た漢字文化　月刊言語　三十六巻十号　十月
現存最古の大唐西域記寫本　いとくら　三　十月
◉轉型期的敦煌學（共編著）　上海古籍出版社　十一月
敦煌的識字水平與藏文的使用　劉進寶、高田時雄主編『轉型期的敦煌學』　上海古籍出版社　十一月
敦煌寫本のおもしろさ　いま、この研究がおもしろい Part 2　岩波書店　十一月

竹沢泰子
解説：神部武宣『さらばモンゴロイド』　生活書院　二月
◉調査研究報告書『多文化共生社会に関する研究——兵庫県における多文化共生社会の実現に向けて——』（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構　九月
多文化共生社会に向けてのパートナーシップ——兵庫県における自治体とNGOの協働の歩み　黒川みどり編著『〈眼差される者〉の近代』　解放出版社　十月
兵庫県の多文化共生の取り組み　兵庫県人権啓発協会　KIZUNA　三月

武田時昌
江戸の珠算文化とその情報源　坂上孝・長島昭編『はかるはかりはかられると世界』　下中部高等学術研究所　十月
中国における自然哲学の理論構造　三島海運記念財団研究報告書　四四　十一月
総説　漢籍の時空と魅力　京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編『京大人文研漢籍セミナー1　漢籍はおもしろい』　研文出版　三月
文系研究者にとっての情報発信とは　静脩　一五九号　三月

田中淡
◉国際シンポジウム　伝統中国の庭園と生活空間（編）　みやこめっせ・人文研科学史研究室　六月
開会講演「中国庭園史の動向と展望」同右
基調講演「日本建築に探る中国文化の古層」『歴博国際シンポジウム二〇〇七　日中比較建築史の構築——宮殿・寺廟・住宅——』　国立歴史民俗博物館　十二月
大仏様建築——宋様の受容と変質——『論集　鎌倉期の東大寺復興——重源上人とその周辺——』（ザ・グレイト・ブッダ・シンポジウム論集第五号）　東大寺・法藏館　十二月

田中雅一
サティー　椎野若菜編『やもめぐらし——寡婦の文化人類学——』明石書店　五月
書評：Claire ANDERSON *Legible Bodeis: Race, Criminality, and Colonialism in South Asia. International Journal of Asian Studies* 5(1)　九月
書評：Mark McLELLAND and Romit DASGUPTA

(eds.) *Genders, Transgenders and Sexualities in Japan. Social Science Japan Journal*, オンライン出版 doi: 10.1093/ssjj/jym050. 九月

◉ジェンダーで学ぶ宗教学（共編） 世界思想社 十月

ジェンダーで学ぶ宗教学とは？（共著）『ジェンダーで学ぶ宗教学』 世界思想社 十月

ヒンドゥー教『ジェンダーで学ぶ宗教学』 世界思想社 十月

ラダジュアリーの女神、ラクシュミー ドレス・スタディーズ 五二号 十月

第Ⅰ部イントロダクション／第Ⅱ部イントロダクション／第Ⅲ部イントロダクション『ジェンダーで学ぶ宗教学』 世界思想社 十月

紹介：『ミクロ人類学の実践』 人環フォーラム 二十二号 十一月

米軍チャプレンの研究――構造分析と主観的観点 国際安全保障 三十五巻三号 十二月

貨幣と共同体――スリランカ・タミル漁村における負債の贈与的資源性をめぐって 春日直樹編『貨幣と資源』（『資源人類学』五巻） 弘文堂 十二月

書評：杉本星子著『「女神の村」の民族誌――現代インドの文化資本としての家族・カースト・宗教』 南アジア研究 十九号 十二月

書評：関根康正著『宗教紛争と差別の人類学――現代インドで〈周辺〉を〈境界〉に読み替える』 宗教研究 八十一巻三号 十二月

Fluid Boundaries, Institutional Segregation and Buddhist Sexual Tolerance: A Response (2) In Gerrie ter HAAR and Toshio TSURUOKA (eds.) *Religion and Society: An Agenda for the 21st Century*, Utrecht: Brill. 一月

事典項目：タンバイア『呪術・科学・宗教――人類学における「普遍」と「相対」』／ベッテルハイム『性の象徴的傷痕』一九五四／デュモン『ホモ・ヒエラルキクス――カースト体系とその意味』一九六八／田中雅一『供儀世界の変貌――南アジアの歴史人類学』二〇〇二／デュル『性と暴力の文化史』一九九三以上『宗教学文献事典』弘文堂 二月

Introduction: Perspectives on the Anthropology of the Military 科研費成果報告『東アジアと南アジアを中心とする軍隊の歴史人類学的研究』 三月

Analysis of U. S. Military Chaplains: Structural Analysis and Subjective Perception 科研費成果報告『東アジアと南アジアを中心とする軍隊の歴史人類学的研究』 三月

紹介：『ジェンダーで学ぶ宗教学』 人環フォーラム 二十二号 三月

◉科研費成果報告書『東アジアと南アジアを中心とする軍隊の歴史人類学的研究』（編著） 三月

田辺明生

Understanding Ethical Basis of Local Democracy: Towards Post-Postcolonial Transformation in Rural Orissa, India. Hiroshi ISHII et al. (eds.) *Northern South Asia: Political and Social Transformations*. Manohar. 六月

Toward Vernacular Democracy: Moral Society and Post-Postcolonial Transformation in Rural Orissa, India. *American Ethnologist* 34 (3). 八月

Book Review. Uwe Skoda, *The Aghria: A Peasant Caste on a Tribal Frontier*. Manohar, 2005. and Yaaminey Mubayi, *Altar of Power: The Temple and the State in the Land of Jagannatha. Manohar, 2005. Indian Economic and Social Historical Review* 44 (4). 十二月

民族医療の知的潜在力――持続型生存基盤パラダイムのための一考察 イスラーム世界研究 一巻二号（加瀬澤雅人との共著） 三月

谷川穣

新刊紹介：阪本是丸編『国家神道再考』 明治維新史研究 四号 十二月

◉明治前期の教育・教化・仏教 思文閣出版 一月

「透明ランナー」は捉えられるか――勝手に走り出す戦後子ども史・オープン戦―― 教育史フォーラム 二号 三月

報告要旨：明治前期の仏教と学校教育 宗教研究 八二巻四号 三月

立木康介

翻訳：トニ・ネグリ『芸術とマルチチュード』（共訳） 月曜社 五月

◉精神分析と現実界 人文書院 七月

シャルコー／ジャネ 須藤訓任編『哲学の歴史9反哲学と世紀末』 中央公論新社 八月

富永茂樹

トクヴィルと憂鬱――精神医学と人文科学のひとつの交差 精神医学史研究 一一巻二号 四月

メランコリーの廃棄――エスキロルを読む 坂口・岡崎・池田他編『精神医学の方位』 中山書店 一〇月

編集後記 精神医学史研究 一一巻二号 一一月

二〇〇七年読書アンケート みすず 第五七七号 一月

腕の振りかたについて 潮三月号 二月

冨谷至

◉木簡竹簡述説的中国古代 人民出版社 五月

◉秦漢的刑罰――其性質和特徴 日本東方学 第一輯 八月

儀礼と刑罰のはざま――賄賂罪の変遷 東洋史研究 六六巻二号 九月

◉東アジアの死刑 京都大学学術出版会 二月

究極の肉刑から生命刑へ 冨谷至編『東アジアの死刑』 京都大学学術出版会 二月

死刑存廃論議の門戸に佇んで　冨谷至編『東アジアの死刑』
京都大学学術出版会　二月
錯誤と漢籍　京都大学人文科学研究所附属漢字情報センター
編『漢籍はおもしろい』　三月

永田知之

唐代喪服儀礼の一斑――書儀に見える「禫」をめぐって――
敦煌写本研究年報　創刊号　三月
相同相異――皎然《詩式》与唐代的文学理論　日本東方学
一輯　八月
摘句と品第――皎然『詩式』の構造――　東方学報　京都
八二冊　三月

中西裕樹

畜語調類的来源及其相関問題　日本東方学　一輯　中華書局
八月
現代畜語鼻音韻尾的来歴　民族語文　第四期
商務印書館　八月
現代中国語の方言　超級クラウン中日辞典　三省堂　二月
「民族」の境界――ショオ族と漢族客家人――　漢字と情報
十五号　京都大学人文科学研究所　三月

藤井正人

◉世界歴史大系　南アジア史1――先史・古代――（共著）
山川出版社　六月

藤原辰史

大地に軍隊を捧げた日　ナチスの収穫感謝祭　小関隆編『記
念日の創造』　人文書院　五月
二〇世紀農学のみた夢と悪夢――ナチスは農業をどう語った
のか？　野田公夫編『生物資源から考える　21世紀の農学
第7巻　生物資源問題と世界』　京大出版会　九月
帝国収穫感謝祭の丘を訪ねて　ハーメルン紀行――ナチスが
組織した熱狂と陶酔　季刊 at　一〇号

船山徹

梁の開善寺智蔵『成実論大義記』と南朝教理学　科学研究費
成果報告書『江南道教の研究』　三月
六朝仏典の翻訳と編輯に見る中国化の問題　東方学報　京都
八〇冊　三月
Kamalasila's Distinction between the Two Sub-Schools of Yogacara. A Provisional Survey. B. Kellner, H. Krasser, H. Lasic, M. T. Much, H. Tauscher (eds.), *Pramanakirtih. Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of His 70th Birthday*, Wien.
「如是我聞」か「如是我聞一時」か――六朝隋唐の「如是我
聞」解釈史への新視角　法鼓仏学学報　一期　十二月
漢語仏典――その初期の成立状況をめぐって　京都大学人文
科学研究所附属漢字情報研究センター編『京大人文研漢籍
セミナー1　漢籍はおもしろい』　研文出版　三月

水野直樹

◉生活の中の植民地主義（韓国語版、鄭善太訳）（編著）ソウ
ル、図書出版サンチョロム　五月
（私の京都）夷川ダム（発電所）と朝鮮人労働者　市民しん
ぶん（京都市）七八三号　七月
「皇国臣民ノ誓詞」と「皇国臣民誓詞之柱」についての考察
朝鮮史研究会会報　一六八号　七月
◉BKII（6), Коминтерн и Корея 1918 - 1941. M. РОССПЭН.（共編）（解説、注、人物略歴など分担執筆）
書評：仲尾宏『朝鮮通信使』（岩波新書）京都民報　二三〇
八号　一一月四日
植民地期朝鮮の日本語新聞（朝鮮文）歴史問題研究　ソウ
ル　第一八号　一〇月
◉京都と韓国の交流の歴史（1）（共同執筆）韓国民団京都府
本部発行　一二月
植民地期朝鮮の思想検事　松田利彦編『日本の朝鮮・台湾支
配と植民地官僚』（国際シンポジウム30）国際日本文化研
究センター　一月
◉創氏改名――日本の朝鮮支配の中で――
岩波書店（岩波新書）三月

宮紀子

◉モンゴル帝国が生んだ世界図　日本経済新聞出版社　六月
『農桑輯要』からみた大元ウルスの勧農政策（下）人文学報
九七号　三月

宮宅潔

書評：籾山明著『中国古代訴訟制度の研究』歴史学研究
八二六号　四月
秦漢刑罰体系形成史への一試論――腐刑と戍辺刑――　東洋
史研究　六六巻三号　一二月
◉科研費成果報告書『張家山漢簡による中国漢代制度史の再検
討』　三月
「司空」小考――秦漢時代における刑徒管理の一斑――　科
研費成果報告書『張家山漢簡による中国漢代制度史の再検
討』　三月

向井佑介

雲岡石窟寺的考古学研究（共著）日本東方学　一輯　八月

麥谷邦夫

道教教理的形成與道氣論　跨文化視野下的東亞宗教傳統　第
二次小型研討會豫稿集　中央研究院文哲研究所　九月

森時彦

◉中国県制の総合研究（平成十五―十八年度科研費基盤研究A
研究成果報告書）　四月
河北省新河県の自然村と戸口動態　森時彦編『中国県制の総
合研究』（平成十五―十八年度科研費基盤研究A研究成果
報告書）　四月
中国棉紡織業近代化的動態結構　日本東方学　一輯　中華書

局　八月
一九一〇年代的中国市場与日本棉紡織工業　一九一〇年代的中国　社会科学文献出版社　八月
創刊の辞　京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編『京大人文研漢籍セミナー1　漢籍はおもしろい』　研文出版　三月

守岡知彦

CHISEに基づく甲骨文字資料の電子化について　人文科学とコンピュータシンポジウム論文集　デジタルアーカイブ――デジタルアーカイブと時空間の視点――　情報処理学会シンポジウムシリーズ Vol.2007, No.15　十二月
『ディープな人文情報学』としての一般キャラクター論への誘い　人文情報学シンポジウム――キャラクター・データベース・共同行為――報告書　京都大学21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」　十二月
キャラクターを考える　人文情報学シンポジウム――キャラクター・データベース・共同行為――報告書　京都大学21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」　十二月
CHISE: Character Processing based on Character Ontology. Takenobu TOKUNAGA and Antonio ORTEGA (Eds.) *Large-Scale Knowledge Resources—Construction and Application*. Lecture Notes in Artificial Intelligence 4938　三月
甲骨文字処理にまつわるエトセトラ　東洋学へのコンピュータ利用　第19回研究セミナー　三月

矢木毅

朝鮮党争史における官人の処分――賜死とその社会的インパクト――　冨谷至編『東アジアの死刑』　京都大学学術出版会　二月

安岡孝一

ケータイの絵文字と文字コード　情報管理　五十巻二号　五月
マスメディアと漢字　オープンフォーラム「漢字文化の今4」報告書　七月
人名用漢字の新字旧字「桜」と「櫻」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　十二月二十日
人名用漢字の新字旧字「竜」と「龍」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　一月十日
人名用漢字の新字旧字「欧」と「歐」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　一月二十四日
人名用漢字の新字旧字「国」と「國」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　二月七日
人名用漢字の新字旧字「渚」と「渚」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　二月二十一日
人名用漢字の新字旧字「青」と「靑」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　三月六日

◉キーボード配列QWERTYの謎（共著）　NTT出版　三月
人名用漢字の新字旧字「福」と「福」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　三月二十日
神と神、榊と榊―常用漢字表拡大のインパクト―　東洋学へのコンピュータ利用　第十九回研究セミナー　三月二十一日

〈京所長、どのたゝいの〉

山崎岳

江海の賊から蘇松の寇へ――ある「嘉靖倭寇前史」によせて――　東方学報　八一冊　九月
山東省威海市博物館所蔵『辛汪巡検司創案記』紹介　東アジア海域交流史現地調査研究　二号　十二月

山室信一

〈思想連鎖〉から見る近代アジア　岡山大学社会文化科学研究科編・刊『東方アジアの文化共生・地域共生研究報告書』　三月三一日
地方・大地から生み出すチカラ　熊本日日新聞　四月一日
女性の日　現代のことば　京都新聞夕刊　四月九日
憲法記念日　この人・この話題　朝日新聞　四月三〇日
ふるさと　現代のことば　京都新聞夕刊　六月一日
◉憲法9条の思想水脈　朝日新聞社　六月
台湾から見る東アジアと日本　周婉窈氏と対談『論座』九月号　京都新聞夕刊　八月八日
台湾　現代のことば　京都新聞夕刊　八月
政治の空白　現代のことば　京都新聞夕刊　一〇月四日
近代日本の平和主義の系譜　佐高信氏と対談　週刊金曜日編『人はなぜ戦争をしたがるのか』　一一月
教科書訂正申請　現代のことば　京都新聞夕刊　一一月二八日
昭和の道に水脈をたずねて　季刊『遼』第七巻二号　一月
ねじれ国会　現代のことば　京都新聞夕刊　一月二九日
明治期日中文化交流史の概況と展望　陶徳民・藤田高夫編『近代日中関係人物史研究の新しい地平』　雄松堂出版　二月
成人年齢　現代のことば　京都新聞夕刊　三月二五日

横山俊夫

稲垣博先生に捧げる言葉　京都「国際学生の家」イヤーブック／Haus der Begegnung, Kyoto Year Book 2006　第31号　二〇〇七年三月
Enhancing Kyoto University's Language-and Culture-Conscious Collaborations with Southeast Asian Institutions of Science and Technology, lecture, at the JSPS Workshop for International Collaboration for the Formation and Development of Science and Technology Community in Southeast Asia, Bangkok, 12-14 February 2007. 第296回国際交流委員会資料　京都大学国際交流推進機構

The Organization for the Promotion of International Relations (OPIR) website (http://www.opir.kyoto-u.ac.jp) 四月

同右 説明スライド（河野泰之氏と共編） 第24回京都大学国際交流推進機構運営委員会資料 OPIR website 四月

Proceedings — Workshop: "International Collaboration for Formation and Development of Science and Technology Community in Southeast Asia", 12-14 February 2007, Rembrandt Hotel, Bangkok, Organized by JSPS. JSPS Bangkok Office 四月

京都大学国際化戦略本部強化事業評価報告書（文部科学省中間評価用、共編／CD-ROM版）OPIR 四月

しつけと笑い——前近代日本文明考 日本18世紀学会年報 第22号 日本18世紀学会 六月

Kyoto University's Ongoing Efforts to Realize a Comprehensive Framework for Natural Disaster Reduction in the Pacific Rim Region, 11th APRU AGM, Zehjang University.（尾池和夫氏、林春男氏、Ainslie Kerr氏と共編） 京都大学総長 website 五月

Closing Remarks for the Special Lecture of Dr. Lester R. Brown and the Panel Discussion, The Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 22 May. OPIR website 五月

旅（第24回'06比叡会議報告書、河合隼雄氏他と共同企画、討論参加、共編） 比叡会議事務局 日本アイ・ビー・エム株式会社 五月

The 9th Kyoto University International Symposium, Integrating Global Environmental Studies Towards Human Security, Kyoto University Clock Tower, Kyoto, 22-23 June, 2007.（要旨集、松下和夫氏、Ainslie Kerr氏他と共編） OPIR 六月

Purpose of "Session 2": Civilizing the Modern Science and Technology for a New Civilization.（右記冊子掲載） 六月

Civility in a Polytheistic World: A Perspective from the Japanese Experience.（右記冊子掲載） 六月

第9回京都大学国際シンポジウム「人間の安全保障のための地球環境学」を開催 京大広報 No.625 京都大学広報センター 七月

フィールドワークの伝統に立った地球社会の共存を目指して——森川里海連関学（ベネッセコーポレーション）分野の取り組み（嘉門雅史氏と対談） BERD No.9 七月

Closing Remarks (at the end of the open symposium of KUIS-9, 22 June) OPIR website 七月

二〇〇七年度 京都橘大学 歴史文化ゼミナール 歴史における異文化交流と女性／第5回 一九世紀西欧の日本女性イメージ（受講者用冊子）、二〇〇七年度 ゼミナール通信 No.6（講演への質問と回答） 京都橘大学エクステンションセンター 七月

The 10th Kyoto University International Symposium, "Active Geosphere Science" Bandung, Indonesia, 26-28 July 2007.（監修） OPIR 七月

Speech for Opening Ceremony; The 10th Kyoto University International Symposium: Active Geosphere Science, Bandung, 26 July. OPIR website 八月

現代科学技術に求められる洗練とは何か グローバルネット 二〇一号 財団法人地球／人間環境フォーラム 八月

第10回京都大学国際シンポジウム「活地球圏科学」を開催 京大広報 No.626 京都大学広報センター 九月

◉京都大学大学院 地球環境学堂 地球環境学舎 三才学林 自己点検・自己評価書 平成一四年四月——平成一九年三月（共同執筆） 地球環境学堂 九月

東アジア研究型大学協会（AEARU）第13回総会・第21回理事会の開催 京大広報 No.627 京都大学広報センター 十月

What is Life? The Next 100 Years of Yukawa's Dream, Nishinomiya-Yukawa International & Interdisciplinary Symposium 2007. eds. Masatoshi Murase and Ichiro Tsuda.（program, abstracts and speakers' profiles/共同執筆） Yukawa Institute for Theoretical Physics, Kyoto University 十月

'The Role of Universities in Civilizing the Global Community', International Academic Conference for the 60th Anniversary of Dankook University: Global Talent Sought-after throughout the World, Dankook University, October 2007.（檀國大学校創立60周年記念国際会議基調講演記録） 檀國大学校 十月

京都大学（Outline of Kyoto University 日英版） 第五回日中学長会議事務局（東京大学） 十一月

◉ *Report of the 9th Kyoto University International Symposium: "Integrating Global Environmental Studies Towards Human Security".* Kazuo Matsushita, Toshio Yokoyama, Hideki Miyashita, Ainslie Kerr & Toshinori Tanaka (eds.) OPIR & GSGES, Kyoto University 十一月

Summary of session 2: Civilizing the Modern Science and Technology for a New Civilization, 同右書所収（Shigeo Fujii, Ainslie Kerr & Toshio Yokoyama） 十一月

京都文化会議二〇〇七 地球化時代のこころを求めて（会議参加者用冊子／共編） 京都文化会議組織委員会 十二月

京都提言2007／Kyoto Proposals 2007、京都文化会議二〇〇七年十二月九日（和文版：同会議企画委員会共編、英文版：Peter Kornicki氏、Tracey Gannon氏と共撰） 京都文化会議組織委員会 十二月

A 10-year project of on-line distance education in multilanguages, Kyoto University.（Toshio Yokoyama, Michihiko Minoh, Yuichi Nakamura & Ainslie Kerr), *Proceedings of the 8th APRU Distance Learning & the Internet Confeence: Sustainable Learning in a Global Information Society, Chulalongkorn University, 12-15*

December 2007. Chulalongkorn University　十二月

◉難波鉦――松之部抄　京都大学人文科学研究所　文明と言語研究班（共編、共同研究拾遺）　京都大学人文科学研究所　十二月

右記檀國大学校国際会議基調講演（十月）、教科書用改訂版　檀國大學校内学生用限定 website　一月

老いて楽しみを増す――貝原益軒『楽訓』から――　まなびすと　2008. 冬 Vol.4（京都アスニー・人文研共催「養生の東西」第二話／正誤表を付し刊行）　京都市生涯学習総合センター　一月

Kyoto University's Policy for International Industry-Government-Academia Collaboration（「京都大学産官学連携ポリシー」英語版、Ainslie Kerr 氏と共訳）　第46回部局長会議　資料9　一月

The Organization for the Promotion of International Relations, Kyoto University（国際交流推進機構　英文紹介、Ainslie Kerr 氏と共編）　OPIR　一月

Opening Remarks for 'the 3rd University Administrators Workshop: Laying Firm Foundations for University Internationalization. OPIR website　二月

国際的な大学連携及びコンソーシアムの活用／京都大学の事例紹介、日本学術振興会／科学技術国際交流センター主催「大学国際戦略本部強化事業　平成一九年度公開シンポジウム：大学の国際戦略――課題と展望――」ならびに英文版「Multi-lateral international university collaborations: Kyoto University's Case」　二月五、六日　於　政策研究大学院大学（席上配付資料および JSPS website 掲載）　二月

挨拶　会誌　55号　財団法人　竹中育英会　二月

第11回京都大学全学教育シンポジウム「京都大学における教育の将来像を問う――第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部・大学院教育の現状と課題を考察する――」（スライド共編、討論参加）。京都大学共通教育推進課　二月

芸術はいま、何を伝えるか（佐川美術館　樂吉左衛門館開館記念フォーラム「現代（いま）の精神（こころ）を語る」、樂吉左衛門氏と対談）　京都新聞　二月二七日

Lecturers' curriculum vitae, *The 21st European Conference — 6-9 March 2008, Prague, Summary*. The Hebrew University of Jerusalem　三月

Report of the 10th Kyoto University International Symposium : "Active Geosphere Science". Shigeo Yoden, Toshiyuki Awaji, James Mori, Fumiko Furutani, Toshio Yokoyama, Ainslie Kerr & Masahiko Matano (eds.). OPIR & KAGI21, Kyoto University　三月

◉嶋臺塾記録　第三冊　京都大学大学院地球環境学堂　三才学林　三月

◉*Sansai, An Environmental Journal for the Global Community*, No.3. Tracey Gannon and Toshio Yokoyama (eds.). Sansai Gakurin, Kyoto University Graduate School of Global Environmental Studies.　三月

◉京都文化会議二〇〇七――地球化時代のこころを求めて　報告書（共同企画・共編）　京都文化会議組織委員会　三月

◉*Kyoto International Culture Forum 2007 — In Quest of Kokoro/ Human Minds for This Planet*（jointly planned and edited). Kyoto International Culture Form Organizing Committee　三月

Opening Remarks, *The Third University Administrators Workshop : Laying Firm Foundations for University Internationalization, January 24-25, 2008 Kyoto, Kyoto* University. OPIR　三月